明治廿五年六月五日發行

女鑑

第十六號

東京 國光社

女鑑第十六號目次

堀越後守忠俊の後室



女鑑

和漢女訓辯（四）

前の數巻を讀みたる人は、婦人は人に伏するなり。といへる事の正しく、私なき天理なる大概を、かつ〳〵心得られたるなるべし。なほいまだしき節うたがはしき事あらば、問ひこゝろみらるべし。知りたらん程は答ふべし。理にあたらぬ條は改むべし。そはとまれかくまれ、和漢女訓の神髓なる、婦人は人に伏するなり。といへる天理は、前の數巻にてときつくしたり、と思ふからに、これよりは、この天理とならび立ちて、いづれを重し、いづれを輕しとさだめがたき、男女夫婦の別となんいへる事を、一つ二つときいづべし。

五倫の一に曰く、夫婦別あり。

五倫の字は書經にいで、その品は孟子につばらなり。君臣義あり。父子親あり。夫婦別あり。長幼序あり。朋友信あり。之を五倫といふ。

姫鑑に曰く、禮記にいはく、禮は夫婦をつゝしむに始まる。とそれ物ごとの禮儀、古の聖人、世の人の人として、鳥けだものにもならざらん事をおそれて、立ておかせ給ふ事なれば、夫婦男女の中をつゝしみて、なれあはざるを、禮儀のはじめとはするならし。男女のわかちある時は、家よくをさまりて、なめげに、まさなき事いできたらざる故に、おや子の中のしたしみ、ひたすらにして、いみ疑ふ所なし。父子の恩したしき時は、その外の人にも、したしき、うとき、たふとき、いやしき品おち〳〵にわかれて、是れにまじはる道、おの〳〵よろしき所の義あり。

禮はたゞ此の義にしたがひて、其事をあやなすばかりなり。これ禮の男女の別によりて、おこり行はるゝ所なり。もし情欲のまじはりのみにして、夫婦男女のへだてなく、おや子の愛ばかりにて、親疎貴賤の儀なきは、禮の行はるゝ所なし。これ鳥けだものゝ道にして、人の道にあらず。人と鳥獸とは、はるかにへだゝるものなれど、わかるゝはしは、男女のあひだにあり。よりて、聖人の敎に、これを愼むことといたりてふかきなり。

たゞ夫婦別ありといへるを見て、夫婦ならぬ男女の間には、別なからんもとがむまじきにや、といぶかしむ人もあらんが、夫婦の別といふときは、男女の別は、おのづから、その中にこもれるなり。世に父子の外、夫婦の親みにましたるものなし。その間にさへ、別といふ事をたてゝ、なめげに、まさなき事なか

らんやうにせり。まして、夫婦ならぬ男女の間におきてをや。されば、夫婦の別とあるときは、男女の別は、おのづから、その中にこもれるものと知るべし。それ男女の間に別なきときは、一國の道德おとろへ、夫婦の間に別なきときは、一家の禮儀すたる。禮は夫婦をつゝしむより始まるといへる、むべなるかな。

論說

女子敎育の要旨

高津鍬三郎

敎育の目的は、男女の別なく、其智能を開發し、其德性を養成して、完全なる人間たらしむるに在り。故に、敎育の方法も、その大本に於ては、固より男女兩性の間に、差別を立つべき理なし。然れども、男女は、生來その体格に强弱の差あ

り。其徳性に剛柔の別あるのみならず、其能力に至りても、男子は判斷力に富み、女子は感應力に富む。されば、男子にして、女子の助を借らず、女子にして男子の力に頼らずんば、幸福なる生活を爲すこと能はず。完全なる人生を、送ること能はざるなり。而して、其夫妻となるや、男女各その特性に隨ひて、其職を分ち、其業を同くせず。即ち、男子は外事を勤め、女子は家内を治む。されば、教育の道に於ても、や丶其高等に進むに從ひ、女子には、主として、人の妻たるに適せしむべき方法をとらざるべからず。それ、妻の職は、一口に云へば、家内を治むるのみなれども、家内の事たるや、極めて多端なり。之を程能く治むることは、容易ならざるなり。譬へば、一家は猶ほ一國の如し、之が主權者たる者は其夫なり。之が總理大臣たる者は其妻なり。之が人民たる者はその子弟奴婢なり。而して、之

を治むるには、飲食調理のこと、衣服裁縫のこと、子供教育のこと、賓客接待のこと、金錢出納のこと等の如き、家内一切の事務に應ぜざるべからず。此等の事務を能くせずんば、其夫をして、毫も內顧の憂なくして、朝野の外務に、奔走從事せしむること能はざるなり、余が女子教育の要旨と認むるものは、此等の事に習熟せしむるに在るのみ。

抑も我が國維新の大變革は、單に政体上のみに止らずして、我が社會の舊事物を一新せしむる機運に向はしめたり。是に於て、一國文化の根本たる教育のことは、夙に政府當局者の注意をひきて、明治五年には學制を天下に頒布して、民智を開發し、文化を進步せしむる基礎を居ゑたり。それより今日に至るまで二十餘年の間には、驚くべき進步を爲して、終に今日の隆盛をみるに至れり。然れども、其

初め舊物一新の際なりしかば、單に泰西の新智識を導くに急にして、殆ど其他を顧みざりしより、今より數年前までは、教育の道、ひたすら、學藝の一方に傾きて、學校は恰も智識の問屋、教師は恰も智識を傳達する人足の如き狀態をなしたりき。當局者大に玆に着目して、其弊風を除き去ることを勉めたりしかば、漸く今日の姿とはなれり。以上述べたるところは、一般の普通教育に就きて云ひたるなり。然るに、女子教育のや、隆盛の機運に向ひしは、漸く數年前のことにして、世間一般何事にも西洋風の流行せし頃なりき。此時、女學校にて教授したる科程は全く時世の影響を受けし故にや、或は從來我國に無かりし故にや、概ね西洋風を其儘に用ひたりき。されば、この課程を履みて卒業したりし女子は、人の妻となりても、實際の世事に疎くして、教育の效能みえざりしのみならず、中には婦人

固有の美質をも失ふ者ありしかば、女子の教育は世間一般の不評判となりて、一時は非常の衰運に向ひしも、蓋し當然の理なるべし。是に於て、其道に當る者、力を盡くして之が改良を圖り、漸く今日の姿となりたれども、猶ほ盛なりとはいふべからざるなり。

二十年來、學問の發達、藝術の進歩は、他に其比類をみざるほどなるに、獨り女子教育の割合に振はざるは、蓋し其大原因なくんばあらず。之を既往に徵して考ふるに、余の認むるところを以てすれば、畢竟今迄の女子教育を受けたる者が、人の妻となりて、實際不適當なりしにあり。語を換へて云へば、女學校の學科は、寧ろ高尚に過ぎて、實用に遠かりしより、之が教授を受けたりし者、高尚なる學藝には長ずれども、卑近なる世事には疎くして、能く家を治むることを得ずして、そ

の妻たる本務を完くすること能はざりしなり。それ、外國語の如き、外國音樂の如きは、決して女子の教育に無用なる學科にはあらざるべし。然れども、今日我國の中等以下の社會に在りては、殆ど其必要を見ざるなり。然るに、數年前の女子教育に於ては、此等の科目に重きを置きて、裁縫及び飲食のことの如きは、たゞ申譯の爲めに、其科目を設けたりし如き觀ありき。此の如き科程を履みたる女子の家事に疎きは、豈當然ならずや。苟も、中等社會の妻たる者、目に一丁字を知らざる程の無學にては不都合なれども、大なる學識も、また平生不用なり。且つ、女子にして、其學識に誇るが如き心あるときは、偶ま其身の不幸を招くに足るのみ、女子の學は、普通文を讀み書きし、加減乘除を能くするほどなれば、人の妻として、事足りぬべし。それより以上の學識は、あるに如くはなけれども、

なきとても不都合はなかるべし。食物を調理すること、衣服を裁縫することなどは、女子の知らで叶はぬことなり。されば、此等の如き、卑近にして毎日必要なることをば、一通り差支なきまで習熟したらん上は、高尚なる文學も學ぶべし。上品なる遊藝も習ふべし。それ、音樂、和歌、繪畫の如き、香、茶、挿花等の如き、藝は、能く女子の性情に適ひ、其品格を高め、其精神を慰むるに足るものなれば、日常必需のことに習熟したる上は、勉めても學ぶべきなり。此の如き敎育を受けたる女子は、人の妻となりて、能く其職を全くし、其家をして、天國たらしむることを得べし。故に、余が女子敎育の要旨とするところは、實用を先にして、空理を後にし、家事を先にして、文藝を後にするにあり、世の女子敎育に從事する諸氏、以て如何となす。

婦人の位置及び婚姻の倫理に就ての歴史上の話

三上參次

こは、三上文學士が、曾て某の所にて演説せし舊稿なり、雜報の料にもやさて、ものせられたれど、いさゝか思ふ旨あれば、しひて本欄に收めぬ、

歴史を繙き、わが上古の時代に在りて、男女の關係は如何なりしかを察し、またその變遷のさまをば、外國の歴史に見ゆるところと、照らし合せて考ふる事、一つの面白き題目なるべし。

この題目にて、我が上古史の中に、まづ人々の注意を惹くものは、諾册二尊のことならん。二尊、八尋殿の柱をめぐり給ふとき、女の神男の神に先だちて、「妍哉可美少男」と唱へたまひしかば、その子を生み給ふときに、兩度まで奇怪の事あ

りしは、人の知るところなり。この奇怪なる話の、眞相如何といふ解釋は、暫く他日に讓るべし。兎に角に、女性が男性に先だち、その上に立ち出でし事が、即ち不祥の原となりしといふことは、明白なりとす。言を換へていはば、女性は、必ず男性の後に從ひ、その爲すところに倣はざるべからず、といふ事ならん。この男尊女卑といふことは、近頃の或る學者は、「是れ、遺傳或は自然淘汰などといふ天然の大作用に基けるがゆゑに、素より然るべき事なり」といひ、「蓋し婦人は、其體力の薄弱なるゝ、言を勿たず、その心裡に立ち入りても、心の大現像なる、智、情、意の三つのもの、孰れも概して、男子に等しとは見えず」といへり。されども、この劣れりといふこと、即ちその勝れたる所以にして、女性が男子のために、敬愛思慕せられ、其の誘掖提携をうくる、最大の源因なりとす。若し女

性をして、何事にも男子に劣らず、反目睚視して、相競ひ相爭ふをあらしめば、敬愛思慕の情、安んぞ其の間に成立ち得べけん。また男子は、安んぞ喜んで之を誘掖提携する事を得ん。蓋し男尊女卑といふ文字は、都合よき文字に非ず。男の勝れるが如く、尊きが如くに見え、又女の劣れるが如く、卑きが如く見ゆるは、是れ、兩性の間に自然に存在せる、分業の大作用なり。兩性各、其の天賦の分業を專門として、漫りに、他の領分を侵害することなかるべし。女性が見聞を廣うし智識を磨きて、その品位を高くすといふも、畢竟其の身に具はれる、分業の範圍內にての事と、心得ざるべからず。

わが上古の世にては、もとより、一夫多妻の風俗なりき。されども、女子は、必ず貞實なるべかりしことは、かの須勢理媛の歌に、「わが大國主こそは、男にいませ

ば、打見るしまのさき〴〵、かき見る磯のさき〴〵おちず、若草のつまもたらさめ、我はもよ女にしあれば、汝を置きて男はなし、汝をおきて夫は無し」云々とあるをば、證據として引くこと常なり。この習はしは、古き支那の歷史の中に、我が邦の事を紀したるところにも見えたることなり。かく一夫多妻なれども、無下に未開のさまなる、一夫多妻にはあらずして、多くの場合に於ては、一人を正配とし、その他はやゝ下りたる、妾のごとき地位のものと認めしものとぞ。しかのみならず、試みに、天祖天照皇太神が、六合に照臨したまひしも、古史はこれを女性の御身なりとして、傳ふることをおもへ。女子にして、一家族の長たる地位に在りしもの、多かりしことを思へ。刀自といふ婦人に對する敬語は、早く上代よりありて、そは戸主といふ語の、縮約せられたるものならん、との說ある

ことを思へ。一天萬乘の尊を以てしても、皇后を敬憚したまひしことあるを思へ。(仁德天皇は、甚しく、その皇后に讓り給ひしこと、史上に昭々たり。)この類を列擧するときは尙多かるべし。げにわが上古の世には、もとより、所謂男尊女卑なりしとはいへ、兩性の懸隔、さまで甚しからず。女子は男子の純乎たる奴隷のみにてはあらざりしことを、推知するに足れり。

されば、他の影響を蒙ることなく、その自然のまゝに、發達したりしならんには、我が邦の女性も、また天則の許す限りは、西洋の婦人のごとく、男子の地位に接近したる境遇にまで、進み得たりしならん。然るに、その途に、大なる故障こそ出で來りたれ。そは、儒教さきに導かれて、女性の發達すべき途を遮り、次に佛教東漸して、一層之を妨げたること是なり。そもゝゝ、儒教にも、「妻之爲」音齋

也」といひ、「夫妻匹敵の義也」といひ、また「女正位乎内、男正位乎外、男女正天地之大義也」ともいひて、大に女性を保護するが如しといへども、是等の保護は、かの三從の一、則（婦人者從人者也、幼從父母、嫁從夫、夫死從子）の爲めに、無効とせられしのみならず、また七出の規則さへ定めありて、女性には權利なく、又その地位は低かるべきものとなりたり。次に佛教東漸して、婦人は三界に家なしと說き、其他種々なる說と、規則とを以て、動もすれば、婦人を惡魔のごとく看做しゝかば、ます〳〵その地位を引き下げられたり。婦人の當に進歩すべかりし道筋を塞ぎしものは、もとより多しといへども、右の二つは實にその重なるものなりしなり。さて平安朝時代の柔弱に引續きては、武家の政治となり、乱世となりて、男子が腕力を振ふのみの世の中となり、また封建制度の

社會となりしかば、婦人は遂に、物の數にも入らず。武家の法度類の中には、隨分之を輕蔑したる箇條を見るなり。かくして、久しき間は浮ぶ瀬もなかりしに、近年西洋の風に吹かれて、女權伸張の旗幟のひらめきそめしは、嬉しき事にぞある。但し此際前に云ひし、分業云々の一條を忘るべからず。英國にても、婦人の投票權の問題には、グラットストーン氏等を始めとし、非常に反對するもの多く、遂に、否決せられたりといふこと、數日前、新聞紙に、その電報を見たりと覺ゆ。「女子をして、政治世界に闖入せしめなば、空想と、壓制と、血の道騷ぎとの外、また何の益をか持ち來さん。」といふ論者、西洋諸國にては、ます〱、盛んなりといふ、我が日本の婦人は、たとひ學問智識に進むとも、漫りに、おのが分業以外の領地を侵し、かゝる冷評を受けざらん事こそ、望ましけれ。

（未完）

史談

堀越後守忠俊の後室

寛永年中、堀越後守忠俊、罪ありとて、配流せられたり。其の妻いたくなげきて、悲みに耐へぬものから、公のおきてあれば、慕ひ行くことも叶はず、折につけてのおとづれをさへ、許されざりしかば、たゞ、ひたぶるに、我が身の行ひを正しくし、露霜に枯れぬ、常盤のみさをゝ守りてぞ居たりける。その頃、水戸黄門頼房の一女の五歳なるを大猷院の養女として、加賀の宰相筑前守光高に嫁がむしることゝ定まりたり。さるにかしづきの女房に、さるべきものあらざりければ、あるもの、忠俊の後室をすゝめぬ。やがて、召し出でられて、一萬石の扶助をたまはり、もりやくさぞせられたる。後室は、もと、本多忠政の女なり。心さまきよらにしてをゝしく、學びのわざにも暗からず、世に、賢女ともてはやされたるほどなりければ、教養の道には、をさをさ云ふべき所なく、召仕ふ女どもにも、をりにふれ、事につけつゝ、

理をさとし道を教へしかば、局の風儀も、おのづから美しうなりもてゆき、他局の女どもとは、いたくことざまに、見えきとぞ。その諭しけることの一つ二つなりとて、あるものにのせたるを掲げ出でゝむ。

女の高聲高笑ひいはした者めきて嫌ふ事なり。奥向は、物靜なるがよろし。女の物語れるは、何となくかまびすしきものなり。獨り／＼が愼まば、囁ぎわたして事すむべし。互に、聲靜に、細君をかしづき奉るべし。囁ぐとて、耳に口よせてはなされなば、人の噂や宣ふと、一座のものも、心おかれてよろしからず。是を耳雜談などいひて、嫌ふ事なり。愼まるべし。又、化粧し、油つくるが善しとて、白粉の面にざらめき、髪の油じみて匂ふなど、下司のやうにてわろし。近江君が、紅粉あからかにかひつけと、源氏に、笑ひて書けるも、誠に、古今同じ心なり。必きは墨黒く、化粧ぎはの、きら／＼となき樣にこそいたさるべけれ。髪は、伽羅たき掛くれば、自然と其の油移りて、しなやゝになるものぞかし。總べて、御厨子黒棚は、必、上壇の床に置るゝ、十二の間にも心次第なり。今は、飾りかた何かと、たしなまるゝ沙汰あり。昔は、御厨子は、御膳棚なりき。何れの時よりか、床の飾には用

ゐたりけん。奥の床には、御琴の類、冠棚をも置かれて、草紙など載せらるゝ事なり。料紙硯箱うはさしの包は、古代より、姫君の調度なり。故に、床飾にはせられたるべし。御丁臺の總角は、飾にしたる物とおぼすならんが、是は、御妊娠のとき、御養生に入る事ぞかし。掛盤に向ひて物まゐるを見るに、かしこまりては居ぬものぞ。掛盤の料理は、古代の法式あるなり。常に御前に伺公し、亦は晴なる座に出でては、左の手を、爪先を内へ、我方にして、片手つき、顔を下げて居り、裾長く引きたるがよろし、今の人々の居ずまひどりの様子は、田舎風なり。姫君などのならはしにあらず。物喰ふとて、箸の先五分とはぬらさぬ物ぞ。五々三七五三毎度御祝御膳の時は、唯湯漬を用ゐて、菜には手を付けぬ事なり。掛盤の配膳は、向ひのつば形より、左の手を入れて、右の手にてふちを取り、左の肘にて、腰巻を押へて、給仕したまへ、長柄銚子等の上臈は、御介添、むかふ箸にまゐるゆゑに、時々は入るべきまゝ、日頃稽古あるべし。色紙に、歌よみてかゝざる事は、申すまでもなけれども、女は、短冊とても、男の様には書かざることとなり。文などもちらし書など、我儘にこそ見ゆれ。出舟、入舟、芦の葉、村雨、山嵐、歸花など、定まりたる書法

を習てちらされば、よかりぬべし。白小袖かさね、三つ紐りなどいひて、折〳〵の衣裳あるゆゑ、姫君の呉服、其の心にてこそ支度はあるべけれ。皆の衆の上着の、きよらめきて、間着のよろしからざるは、心見えてわろし。間着はよろしくて、上着のおとりたるはよし。されば、結搆には嗜まれませ。程々によりて、とりかへても着られよかし。扨、女は、物を氣にかくる癖あるものなり。常にたしなまば、何事も、氣にかゝらぬものなり。妬み恨みと言ふも、皆、物を氣にかくるよりぞ出で來なる。又女は、男ど違ひて、詞のあやまちを咎めぬものなり。心にさはりたる事をも堪忍するが、女の操なり。いかにも輕きうちに、物どと洗ひ流して見よ。心にかゝる事なし。我昔發明したる事あり。若かりし時、慶長の末、越後崩の年、初時鳥を、閑處に居て、左の耳にて聞きたりしが、俗に凶事なるといふ。憖に耳にとまりて、心憂く思ひしが、其の夏、我が夫、最上へ御預に成り給ひき。去年の夏、厠にて、又左の耳に聞たれ共、今はかゝる身なれば、何か心にかくる事あらむ。定めて命の終らむは、願ふ所にもあれば、露も氣にかゝらざりき。かくまで、思ひ捨てたる身なれども、召し出だされて、かしづき申せば、耳には善惡なく、時鳥に吉凶な

し。唯、心の趣く所によれば、何事も、心に掛けたまふな云々とあり。」此は、もとより、後室が言行の片はしなれば、これのみ心得たりとて、女の脩むべき事、悉つきたりとにはあらざれど、此の心を心として、万の事に應用なば、過ちすくなかるべし。さては、今の孃等の、その身の行ひを脩めず、うきたる方に心傾き行くらむ疾をいやすには、こよなき藥ならんかし。

忠義者つやが事　片岡正占

つやは、肥後國阿蘇郡小國の郷下城村の百姓、七兵衛と云へる者の家に育ちし下女なり、其家極めて貧しければ、つやが十七歳の時、錢十貫文の質にして、人に仕へさせしに、つやは仕ふる暇をはかりて、さま〴〵に心を砕き、夜更る迄、獨り起居て苧をうみ、綿をつむぎ、人に賣て、些少の價にかへて貯へおき、十三年にして、自ら身を贖ひ歸りしに、其家ます〳〵貧しくて、又、つやを質にする事前の如し、つや彌々力を尽して六年にして、又、贖ひ歸りしが、不幸多くして、主人のすぎはひをやめるを見るに忍びず、又、人に仕へて、一年の身の代を送りつれど、猶其費を

補なふに足ず、又、身を質にして銭十貫文を得て、主人を扶け、四年にして自ら贖ひかへりしが、猶、其家の状立ゆくべくもあらねば、又、身を質にする事前の如し、此時、夫婦の年老、力衰へて農事も爲し難く、外に助くべき人もなければ、つや深く悲しみ、様々に身を苦しめて、二年にして、又、贖ひ歸り、力を盡して、農業を事とせり、總て、二十六年の間に、五度人に仕へ、四十餘貫文の身の代を得て、主人を助けし辛苦の程、譬ふるにものなし、主人も、つやが年四十をこえ、終に寡にして終らん事を憐み、彼がよるべを求めんとせしに、里人も、其志にめで丶迎へんと云ふ者多かり、つやは、此由を聞て、志はさる事ながら、齢かたぶき、貧しきに苦しみ給ふ主人をおきて、己が身の所縁を求めなば、假ひいかなる、幸ひありとも、我心悦こばじとて受ひかず、兎角する程に、主人妻病に伏して、手足働らかず、つや晝夜となく、側にありて、帶をもとかず養ひ助くる事、八年計りなりしかば、安永四年、領主より褒美して、銭そこばくを與ふ、其後、主人夫婦共に死して、跡つぐべき子等なければ、人々相はかりて、武吉と云ふ者を養子とせしに、つや、又、之によく仕へしかば、武吉夫婦も深く憐みけり、同九年、領主より重ねて褒美すべき

沙汰ありし時、つや、たま〳〵病に伏して危ふかりしかば、郡代も深く憂へ、錢を與へて、病用を助け、村里の心あるものは、醫藥を贈り、人參を與へ、近きわたりの醫者など、招かざるに來りて、病をとひげり、武吉夫婦も、異にいたはり扱ひしを、つや、數多度禮をかへして、前の主人、夫婦に仕へて、其終をも見果しかば、心に思ひ殘す事なし、又、前の主人と、同じ年に死せむ事こそ願はしけれ、老朽る迄ながらへて、今の主人の煩ひとならんよりは、死するに如ずといへども、賤しき身にして、人々の恩を蒙むりぬれば、其人々の許に行て、一言の禮を述むがため思ひ起して、藥をも服するなりと云ひしが、遂に其年の暮に、六十五歳にて失にき、皆人、しると知らざると、淚落しつゝ、彼が爲に石の標を立けりとなん、（孝義錄肥後部）

編者謂へらく、此つや女を產し父母は詳かならねど、百姓七兵衛の下婢となる者なれば、下賤も、亦、下賤なる事は云ふを俟ざる者なれば、其父母とても、身を質にして使はるゝには、かく仕へよと迄は敎ざりけんを、其主人、貧困に迫る時は、自ら暇を告てかへるか、又は、外家に仕へかふべきが、通情なるを、主人の爲、五度迄も其身を質にして、二十六年間も、主人夫婦を養成ひ、其齡四十に餘

れるを以て、寡にて終らんも憐れなりとて、所縁を求めむ事をはかりしを、つやが心に、齢かたぶき、貧しきに苦しみ給ふ主をおきて、己が身の所縁求め、いかばかりの幸ひありとも、我心よろこばじと受ひかで、主人の妻病に伏して、手足の働かざるをも助けしのみならず、主人夫婦の死別にも、心を盡しゝのみならず、跡繼主人にさへ、忠に仕へしかば、後主も異に扱ひしよし、かゝる者なれば、他の人々も憐がりけり、かくて、老衰へ、病るが故に、主人は素より他人々も種々と病養を加へければ、主人の煩ひとならんも恐こく、又、他人々にも、報恩を謝しつゝ、薬をも服しゝが、遂に六十五歳にして身退りしとぞ、此つや女を男子にして、公に仕へさせましかば、國家の爲、忠勤を擢むでゝ、名臣と賞歎せられましを、噫、

家政

育兒小言（十五）

武谷水城

衣服の事(續き)

衣の少しにても濕りたるものは着すべからず、洗ひて後十分乾したるものを用ゐるべし、着たるまゝにて濕りたるものは、速かに着替へさすべし、又日光に晒して、未だ熱氣の全く去らざるものは着すべからず、火燵などにて温め過たるも宜からず、總て衣服の温に過ぎたるものを着する時は、皮膚の感じを鋭くし、感冒を誘起して、身の尫弱の固と爲る、さればとて、冷えたるものを其儘に用ゐるは、亦感冒を誘ひ易し、大凡人の身の温度程に、人の体温にて暖るを宜しとす、春秋季候の變り易き時、梅雨の時、又流行病などある時には、特に衣服に注意を爲すべし、

小兒成長するに從ひ、次第に寒暖適宜の衣服に慣れしむる樣に注意すべし、寵愛の餘り、妄りに衣を重襲せしめて、戸外にも出さず、大事に爲過す時は、身の感覺過敏と爲り、僅の風に吹かるゝも、忽ち感冒する慣習と爲る、貧賤の徒に頑健のもの多く、高貴の家に尫弱の兒あるは、生長して後、身の運動の强弱にも因る事なれども、衣服の慣習も亦關する者あり、要も無きに常に襟卷を用ゐるもの、一日之を忘るゝ時は、忽ち寒冒するにても、其一例を見つべし、さればとて、寒冷に堪へしむ

るは、小兒の身を强うらしむる基也とて、特更に衣を薄くし、又は長を短くして、身を寒からしむるもの有、是等は大なる誤也、頑健の小兒は、或は僥倖にして堪るを得べきも、尋常以下の体質のものは、終に爲に虚弱の身と爲るべし、過たるは猶及ばざるが如しとは、何れの事の上にも應用して謬らざるものなり、

沐浴の事

小兒は斷ゑず成長爲すが故に、身の新陳代謝の機能甚旺なるもの也、故に尿屎の排泄も大人よりは屢なると同く、汗垢等の如き皮膚の排泄物も亦多量にして、此等体内に不用有害のもの鬱積して、皮膚の氣孔とて、呼吸する孔を閉鎖る時は、害物体内に鬱滯して、忽ち病の因と爲る、此故に屢小兒を浴せしめて、此等のもの丶排泄を能くする事は、亦大切の一事と知るべし、

小兒生れて後、凡そ百四五十日の間は、病氣等無れば、少くも隔日には浴せしむべし、屢浴せしむる時は、小兒の身を健かならしむる事大なるもの也、

入浴は朝乳を呑す前か、若くは正午前を宜しとす、寢床の内にて直に衣を脱ぎて、浴せしむべからず、暫時外氣に觸れしめて後、衣を脱がざれは、外氣頓に身を冒して

寒冒する事有、入浴時間は、凡十分乃至十五分時なるべし、浴後は猶豫せず衣を着せ、少時の後乳を呑すべし、浴後直に外氣に觸しむべからず、沐浴を怠る時は又手足の關節爛るゝ事有、

浴湯の溫度は、通常列氏二十七八度を適當とす、東京抔にて、小兒殆ど絶叫せんと爲るが如き高度の湯に浴せしむるもの有、甚害有、又之とは反對にて、歐各國にては、人多くは水浴を爲すの風也、故に小兒の浴湯も、生後凡そ一ヶ月を經れば、溫度を減ドて、漸次に冷水と爲す事を說き、又是を實行するものもありしが、近世に至りては彼國の醫學者亦此說を採らず、少くも十ヶ月を經ざれば、皮膚の感じ強くして、冷水に適せずと云へり、我邦にては冷水浴の慣習無し、俄かに冷浴に改めん事、行はれ得べき業にも非ず、されども能く慣るゝ時は、健康上冷浴の功德多き事は、今日内外の衞生學者の證する處なり、されば、小兒成長するに隨ひ、自然に浴湯の溫度を降して、(固より冷浴まで降すに及はず、)次第に慣れしむる時は、皮膚自ら强固と爲りて、病に感ずる事少く、健康上の効益少からざるべし、

(正誤)十三號、唐澤は澤橋の誤、鶴千代は綱村の誤、又十五號、(虛弱のものは)の六字は衍。

婚禮式（第五）

有住齊

次雜煮膳出、（双方の右）

本酌銚子盃三方持添、相進み、婿へ二獻盛、加に立、一獻盛、銚子盃三方持添へ立、嫁の方へ持行、（立居前の如し）二獻盛加に立、一獻盛、銚子盃三方持立、下座へ退、中の盃を下に重、納る也、

次吸物膳出、（双方の左）

本酌銚子盃三方持添、進み、嫁の前へ持參、嫁へ二獻盛、加に立、一獻盛、盃三方銚子持添、婿の方へ持參、（立居前の如し）二獻盛、加に立、一獻盛納盃、

本酌盃三方銚子持添、提子へ目遣して、右へ廻り、立、下座へ向行、提子は靜に右を受て立、三足上座へ向進出、銚子と肩の行違程にして、本酌の後へ付添、共に勝手へ退入也、

次吸物膳引、　次雜煮膳引、　次拾土器引、　次引渡膳引、　次色直小袖出す、

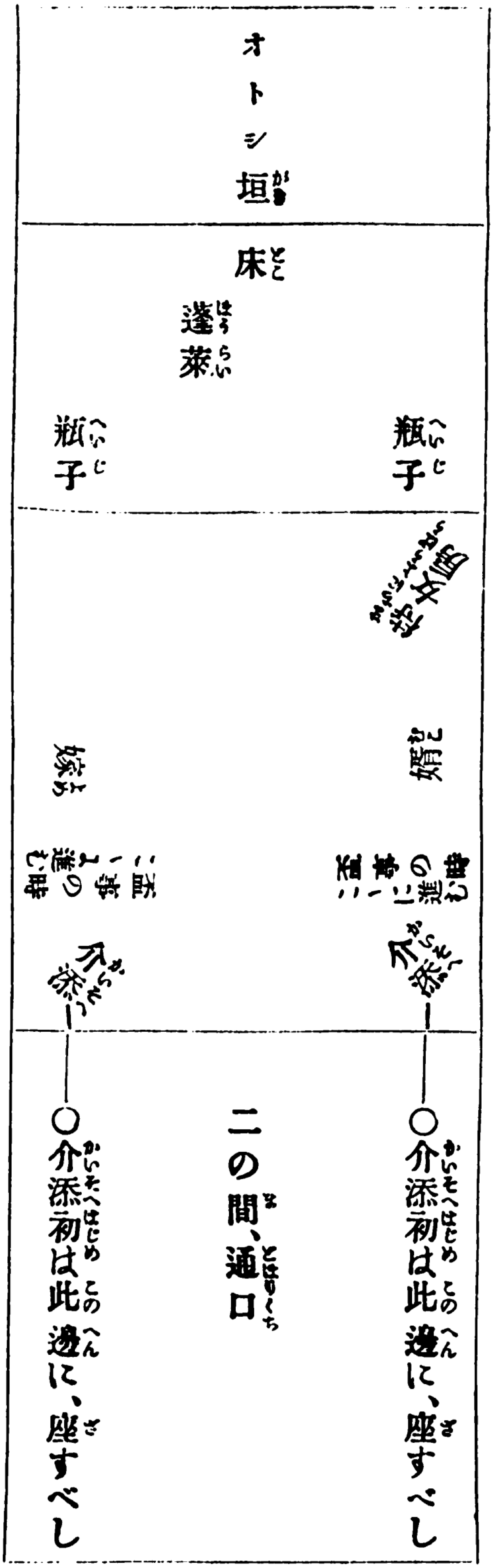
但廣蓋に積出、婿の介添へ渡す、婿の介添持立、下座にて、嫁の介添へ渡す、嫁

の介添持立、嫁の前へ進み披露す、口上御色直小袖進せられ候よしまで也、嫁禮あり、婿答禮ありて、直に引、

右にて祝宴畢り、双方退座、

但此時待女房、新夫婦を誘導して、婿の祖先靈前に蹲踞せしめ、默禱す、夫より暫休息也、

祝席の座配



右は座敷の都合により、婿嫁の座配、入替る事も有べし、庭ある方を婿の座と定

むべし、嫁は主なるが故也、

若立禮なる時は

一婿、嫁、待女房の倚子あるべし、座配は前に同ト、並に机程の卓子五つ用意すべし、是婿、嫁、待女房の前と、神前に一つ、銚子提子盃三方を置用也、又下座に一つ、是は盃組替の時の用也、倚子も介添女中分二つ、本酌加の分二つ、入用也、都合七つ也、

第一熨斗鮑三方出たる時、まづ神前にある卓子を、婿嫁對座の眞中に直して後、熨斗鮑を出し、其上に置て、三足下り、輕く禮して引なり、

次引渡膳、及捨土器出、双方の卓子の上に置也、(但捨土器ハ、引渡膳と、はなして置也) 本酌は、盃三方銚子を持出、先下座の倚子に扣、樣子見斗ひ、進み出、嫁の前にいたり、盃三方を、引渡膳に並べ、右の方に置、二足出て、酒を盛なり、献數は前に擧たる如し、三獻宛すみたらば、本酌下座へ退き、卓子の上にて、盃組直し、倚子に扣居る也、此間に通ひ二人出、引渡膳を引、雜煮膳を出す也、さて加は下座の、卓子の上にて、銚子に向ひ合て、加へるなり、加すみたらば、倚子

に扣居べし、其他は前に替る事なし、

一色直の式と云は、夫婦契約すみ、宴會三々九度も調ひて後に、平生の食膳につくの禮なれば、禮服を双方とも、平服に着改めて膳につく也、是を色直しと云は、禮服は白色なるを、織色染色の服に、改むるの名なり、されば、禮服を脱の謂にて、女は袴を用ゐず、婿は羽織袴に改む也、袿はもと内衣の謂なるが故に、色替りを、猶用うべし、扇、沓、帖紙は、省くべし、髪も平常の髪に、結ひ直すべし、

一色直の膳部は、四汁十一菜、(七五三也)より、一汁三菜まで、何ほども略法あり、只平常の膳に異なるは、契り子餅とて、淵高に盛たるを、小豆の粉をそへて、第一番に出すなり、しかしながら、据たるまでにて、直にひくべし、さて喰料の膳、常の如く出し、中酒もあり、島臺、押臺も出るなり、

但色直しは、當時は當夜にすれども、三日目にするが本式なり、中古の物語史等には、三日目、或は五日目に、露顯とて、舅姑及親屬ども、打より、宴をひらき、樂をあぐる也、然れば三日の間は、神前に夫婦つゝしみ居て、たのしびをあげざるが法なれば、當夜うたひ舞などするは、正義にあらざるなり、

家內衛生（十四）

三笠舍主人

水(續き)

淨水法、水を淨く爲すに數法有、其內にて、最も確實なるは、水を煮沸すなり、又水を凍らす時は、水中の汚物を遺して、水分のみ凍りて淨く爲る、海水の如き、亦此法にて飲料と爲す事を得る、又蒸餾する時は其水淨く爲る、海水を飲料と爲すには、主に此法を用う、又明礬或は石灰水を加る時は、水中含む汚物と共に水底に沈澱して、水の上層淨くなる、又過滿俺酸加里を加へ、水を酸化せしめて淨く爲す法あり、支那にて勞水と稱ふるものは、水を手杓に取りて、反覆空中にて注下し、空氣を混じて酸化せしめたるもの也と云、此外猶種々の法あれとも、要少ければ述べず、

此等の數法中、煑水は其効確實にして、且つ簡易の良法也と雖、一時に大量の水には用ゐ難し、其他の法も、或は容易く行ひ難く、且概ね大量の水には用ゐ難し、其最も簡易にして費用多からず、大量の水に施し得るものを、濾過法とす、此法は本邦にても早く行ひ、又支那にても唐宋の世、既に是を行ひたりしものにて、是を洗

水と稱へぬ、
水を濾過するには、砂を用ゐるものと、炭(木炭或は獸炭を用ゐ、或は海草の炭を用ゐるもの有)を用ゐるものとの二あり、(或は混用するもの有)炭は飽滿し易く、汚物を吸ふ力を廢止するも、砂は其力久しきに耐ふるが故に、砂の方優れり、水は砂又は炭の隙を透る時は、爲に自己の汚物を吸取られて、清淨と爲るなり、砂礫なき川の水は常に汚濁あるも、砂礫多き川の水は常に清淨にして、夏日旅客の渴を醫する事あるにても、其力の大なるを見つべし、
總て飲料水は、先化學家に托して、其水質の試撿を受くべし、試撿の上にて善良なるものは、其儘に用ゐて可なり、少しく疑わるもの、又最良の水にても、大雨の後濁りたる時等は、必ず一回上の法に依りて、濾過して後に用ゐるべし、又夏時特に惡疫流行する時等には、用ゐる前に必ず一回煮沸すべし、煮て貯ふるには、必其器を閉鎖し置くべし、夏時は冷水よりも麥湯と爲して用ゐるを良とす、麥湯は冷して用ゐるも可なり、
渴する時、一時に多量の水を飲むべからず、胃を傷ひ易し、特に烈しき勞働の後な

どにては、貪飲を愼むべし、之に反して、渇する時に強て飲水を忍ぶは甚良からず、特に病中渇甚しきものに、飲水を與へざる等は、身の運營を妨げて健康上に鵠害あり、但是等は宜しく醫士の指圖に從ふべし、

雜用水は、其清淨飲料水の如きを要せず、され共、亦決して不潔の水を用ゐるべからず、例之ば、鐵氣多きものは衣服を洗濯して其質を惡く爲し、塩類多きものを建築等に用ゐる時は、吸收の性多くして人の健康を傷ひ易く、又汚物若くは病の毒素などを含む水を地に撒く時は、之れより其毒傳播する事あるべし、されば歐洲にても、多くは飲用水と同ト上水を用ゐるべきを說くもの多しと云ふ、

歐米の大都府にては、淨水を十分に得る事、經濟上易き事に非ず、彼邦の衛生學者、健康の人一日に用ゐる水量を下の如くに算出せり、則飲料に一、五「リッテル」、(一「リッテル」は凡我五合以下同)割烹に三、五、盥嗽に二十二、五、家屋器具を洗ふに十三、五、衣服洗濯に十三、五、合計五十四「リットル」にして、此外浴湯に用ゐるもの一人一回の量、凡そ百七十「リットル」を要すと、是は要少き事の樣なれども、用水を中央給水法則水道に仰ぐに至る時は、此等の豫算亦要用と爲るべし、故に筆の序でに記しぬ、

(附)氷は近世運輸の便開けたると、人巧にて容易に製し得るとに依りて、需用供給共に大に増加するに至れり、其天然のものと人巧のものとを問はず、外用例之ば疾病等にて外より冷すに用ゐるには、十分清淨のものに非ざるも可なれども、内用と爲すものは、水と同く至極清淨のものを撰用すべし、是を用ゐるには、必ず其筋の撿査濟のものなるべし、稀に汚水を以て製したるもの有、是等を用ゐる時は忽ち病の原と爲る、最も注意すべし、

氷片は病症に依り、内用する時は、大なる効あるもの也、され共、清淨の品と雖、少にても是を濫用する時は、胃の加答兒を興し、消化の不良を來し、慢性胃弱の原と爲る、僅かに冷水に混して適宜に用ゐるは可なれども、決して貪飲爲すべからず、特に小兒抔には氷片を用ゐるの慣習を附くべからず、近世醫家の經驗に依れば、氷片は渴を醫するものに非ずして、却て是を増すもの也と云、

女子書牘文論（承前）

目黒和三郎

女子書牘文沿革を述ぶる途中に於いては、いはまほしきこと數々あり、そは、期ごとに、文章上の用語にかはりあるハ勿論、尊敬語等のうつり變りたる事共なり、たとへば、侍り、給ふる、聞えあげ、候ふ、申し、申上、申度、候ふべく候、などの如き、これ等を、一々言質上より論ひ起して、終に今日に用ゐなれたるまでのあらましをいはゞ、隨分面白きこともあらん、又消息文にとりては、必要のことゝあらん、されど、今は消息文沿革のみを述ぶるは、本論の旨意にあらず、本論の旨意は、今日一般の準據すべき、摸範とならん消息文を示すにありて、それにつき、消息文の沿革を略述せる迄なれば、すべての事、いはまほしきことも、大方はもらして、今は只ひた走りに走りて、目的の場所にいたりつかんとす、やがて本論をへたる後には、此等の事、とりすべて、又別に悉しく論すべければ、見ん人、その疎略をな詈りそ、又既に、この沿革の略述も、號を重ね來にければ、諸孃の眼も、あきはて給はんことを思へばなり、

前回、第四期の變化までいひおきぬ、第三期より四期にかけては、文章の變化、用

語の變化、實に目立つばかりにして、沿革中の沿革なりしが、第五期に至りては、ますく〳〵その變化いちしるく、終に、今日普通の女用文(女學校等新しき教育を受けて生長せるもの丶外)と、大差なきまでに至れり、第五期は、乃、足利氏の末より、德川氏時代、和文學の未隆盛にあらざりし以前までの間にして、一例を擧ぐれば、太閤記十四卷、山中山城守として、御一覽あるに、女の文にて、筆勢いとうつくしくかきつゞけたり、(次に左の文をのす)

たよりの船をよろこび、そゞろにとり向ひまゐらせ候、(中略)あわたゝしき、出船のいそぎに、とりまぎれ、いかゞ申候や、わきかねまゐらせ候、めでたくかしく、くりかへし〳〵、其後消息のおとづれ、おはしまさず、(以下略)

瀬川うねめ殿　菊

人々申給へ

今日の女用文に比較すれば、差別なきが如くなるべし、第六期に至りては我か邦、國文學の中興時代なれば、消息文に至りても、又復古の時代あり、されど、消息文には、二様の變遷ありて、一は國文學者の擬古文派にして、專、中古の文に溯りて作

爲せるもの、一は從來の沿革をそのまゝに、承けて作爲せるもの是なり、從來の沿革をうけて作爲せるものは、今日普通のと異るところあれど、擬古文派のものは、當今に隔りて、第一期第二期のものに彷彿たるに至れり、乃、

神無月の頃、山里より、下りたる紅葉の枝につけて、

鵜殿よの子

かゝるかくれがをも、もらさぬ立田姫の心ばへを、やみの錦とはなしはてずもがなと、待わたりつる程は、時雨ふる日も、長くのみおぼえつれど、猶なぐさむ方も侍りしを、今はかくいたづらに、散りすぎにける梢をみるに、此後はまして、道もおくてこそと、心細さもさびしさも、いはん方なくながめ侍り、

またれつる、人の心も、もみぢ葉も、
うつろふ色を見はてつるかな。

（未完）

百人一首和歌解（つゞき）

井口隆太郎

殿富門院太輔

見せばやなをじまのあまの袖だにもぬれにぞぬれしいろはかはらじ

此の自分の袖が　血の涙に染まつて、此の樣に色の變つて居るのを、つらひ人に見せたいことである、あの陸奥にある、雄島の海人の袖は、始終浪の爲にぬれて居て、乾く間もないから、ちつとは色も變りさうなものなれども、其の海人の袖ですら、びしよぬれにぬれては居るけれども、色はかはらない、然るに自分は戀にこがれて、常に泣き暮して居るから、涙はもはや出盡くして、血の涙が出て袖が眞赤に染まつて居る、この袖をつれない人に見せたいものである、

海人は、漁夫のことなり、ぬれにぞぬれしは、びしよぬれにぬるゝといふ意なり、みせばやなのなは、感嘆の辭なり、

後京極攝政前太政大臣

きり〳〵すなくや霜夜のさむしろに衣かたしき獨かもねむ

蟋蟀といふ虫が寒さをかこちて、いかにもあはれある聲を出し、頻りにないて居る、この霜夜の寒い寢床に、たゞひとり丸寢をして寢ることであるかな、こんな夜でも二人して寢るなら、ちつとは心もなぐさんでよからうに、こんなにたつた

獨で寢て居れば、實にものさびしくつらいものである、
きり〴〵すなくやのやは、嘆辭にて、蟋蟀なく霜夜といふに同じ、
さむしろのさは、たゞ添へたる辭にて、莚といふ意なり、寢る時は莚を敷くものあれバ、床寢のことをかく云へるなり、衣かたしきは、衣片敷にて、丸寢をすること、獨かもねむは、獨寢るかしらんといふ意にて、もは輕く添へたる辭なり、

二條院讃岐

我が袖はしほひに見えぬ沖の石の人こそしらねかわくまもなし

箇樣に、そなたを戀ひこがれて居るといふことも、深くつゝみ隱して居る事故、そなたはちつとも知るまいが、あまりそなたの戀ひしさに、始終涙が袖に流れて乾く間もない、丁度自分の袖は、海水が引きしりぞいた時にも見えない沖中にある石の如く、常にぬれて居るか居らぬか、人には知られない通りに、そなたは自分が袖のぬれて居ることを知るまいが、自分が袖は常に涙にぬれて居て、ちよつとも乾く間もないことである、少しは心の中を推察して呉れたがよい、

鎌倉右大臣

世の中はつねにもがもな渚こぐあまのをぶねのつなでかなしも

此の世の中は遷り變りやすいものなるが、どうぞ常に遷り變らずして有りたいものである、さうすると自分も充分長生をして、度々この海邊にきて、此の面白いけしきを見よう、どうも此の海邊の浪ぎはの處を、漕いで行く、海人の小舟の綱手を引いてゆく、その樣子の面白さ、何とも箇ともいはれない、

かなしもは、面白いといふ意にて、もは添へたるなり、今は唯悲哀のことをかなしといへども、古は面白きことにもしか云へり、

參議雅經

みよし野の山の秋風さよふけてふるさとさむくころもうつなり

吉野山を吹く秋風も夜がだん／＼深くなるにしたがつて、淋しさもまさつて來るのに、其の上にまた、里々には衣をうつ聲が遠く聞えて、一層さびしさを添ふることである、

みよし野のみは、補めて添ふる辭、此は大和の吉野山なり、昔は天皇の行幸も度々ありて、離宮などもありしかば、ふるさととは下の句に云へるなり、ふるさと

は、故郷の意なり、さむくは、さびしくといふに同じ、ころもうつとは、砧のことにて、衣を槌にて打ちならすことを云ふ、其の音はいかにもさびしく、あはれに聞こゆるものなれば、其の夜の淋しきよしを、そのまゝにいひあらはしたるものなり

漫録

林述齋女訓（つゞき）　君山居士

一このむ事をもきらふ事も、夫の心をはかりてすべし、下に向ひても、夫の愛する人はよくあつかひ、夫のきらふ人に荷擔すべからす、衣服調度のたぐひ技藝の末までも、夫の好不好をかうがへよ、おのれ専なるべからず、されど、夫に格別のあしき事あらん時に、同じくあしき事せよと云にはあらず、

一男女の別と云事ほど、太切なる事はなし、古へは、男女はものうけとり渡しさへ、はゞかりてせざりしほどの事也、さて他所は言までもなし、親戚にても家臣にても、男子に近つくべからず、心安くもの云へからず、隔意らしくして居べき事専要也、若き時は自然耻かはしくて、みだり

なる事もなきものなれど、年とるに隨ひ、世事功者らしくしなすより、つひには、はからざる失節の事も出來るものにて、多くは中年以上の人にあるものなり、尤つゝしむべきの肝要也、」

一人に上たる身は、下にて慈悲ふかしとて、かたじけなく思はるゝ所なければならぬものと、能々思ふべし、とかく下の育つやうに、人のいたまぬやうにといふ一念を、常に忘るべからず、」

一恩と威との二ッなければ、人の上たりがたし、其威と云もの、顔いかめしく詞あらゝかにするの類にあらず、人のよしあし見分け、公にしてたがはねば、おのづから、下々おそれて心服するものぞ、又我身持正しく行義よければ、下にて正しからぬ事も、不行義もならぬ樣に成り、いひ出す事さへも出來ぬ樣に成ゆくものなり、是則威なり、恩は何事にもよらず、なさけ深き事にて、妄りに物を與ふ事にてもなし、されど、與ふべきはをしげなくとらすべし、

一下のおろかなるは、憐むべし憎むべからず、もとよりいやしき身のいさゝかの宛行にて、我につかふるほどなれば、其智もそれだけなる筈と、堪忍して遣ふべきなり、

一年とりたるは猶更の事、さなくとも、時としては人と思ひもよらず、我よりまさりたる分別ともあるもの也、さて人の云事よく聞わけて、取用ふべき事は聞うけて用うべし、我意つよく、人の詞を聞入ぬほど、あしき事はなしと心得べし、

一正直、律義、實意、厚情なる人を取用うべし、これ人のうへのみならず、おのれも、亦さあるべし、又わが爲に便利よく、物ごとわが意に合せて、調寳に思ふ人には、油斷すべからず、

一物事大まかにのそらりとゆたかなるべし、せこつくべからず、されど、とりしまりなく、ばつとする類と混ずべからず、上よりは大目に見捨ねばならぬ事もあり、聞ぬふりにしておくべき事も多きものぞ、さりとて、下の風義行作あしきをいましめざれば、家はをさまらぬなり、人の過失と惡心をよく分別せよ、過失はなりたけゆるやかにはからうべし、惡心の筋は少しもゆるすべからず、しかし、わが淺く小さき心より觀れば、大なる惡心と思ひあやまりて、實はさまでなき事も、又あるべし、能々心を平かにして、明かに辨ふべきなり、

一取締ある樣にする迚も、物ごと手詰にして、透間のなきやうにすべからず、鄙諺に重箱の内を、連木にてまはすと云喩、いやしき詞ながら理に叶へり、

一大家は表の役人備る故に、奥向おもはしからずとも、家のをさまる事もあらんなれど、元來家を治るは、内を本とする事なれば、其本を亂すべからず、まして小家は役人の數揃はず、淺まし事も亦洩やすき故に、奥のよしあし速に全家の治不治に係る事ぞ、此處あつく思ひはかるべきなり、

一女は兎角、身ひいきつよきものにて、わが身寄

の者をば親しみ、他人をおろそかに思ふが其常なり、多くの人を召仕ふ上にては、さあるべからず、只人々の心底を察して、身よりの、他人のと云、へだてあるべからず、

（未完）

庭の訓

菅の舎主人

繪はたてたる御能にても、候まじく候へども、人のかたちうつくしくかきならひて、御つれ／＼ならんをりには、物語繪などあそばして、御覧じ候べく候かまへて／＼、歌あそばし候へ、女房のうたはあまりにことゞ／＼しくて、みがきくたせるかたなどは候まじく候、さればとて、艶あるかたにひきとられて、たましひの候はぬもわるく候ぞ。

○繪は云々、書は面だちたる藝にてはなけれども、かき給ふべきなりとあり、○物がたり繪、歌物語の中にあるべき繪なり、今俗に源氏繪などいふが如し、○かまへて／＼歌あそばし候へ、かまへて／＼と端を改めたるは、繪の類にはあらず、うならず、よみ給はでかなはぬなりとぞ、○女房のうたは云々、源氏物語に、すゑ摘花の君、父君のかきおき給へる歌のずいのうを、源氏の御許に進じ給ふを、源氏姫君の御學問に用なからん、とのたまふも此心なり、契冲阿闍梨「さくやいかにうはの空なる風だにも松に音するならひありとや」といふ歌を許して、初五文字、女のことばにあらず、といはれたるなど思ふべし、小町の歌は、あはれなるやうに

てつよからず、といへるこそ、女の本體なるべけれ、凡歌にはかぎらず、女たらん人は、よろづに此用意を忘るべからずこそ、牝鷄の晨といふも、女の男わざするをにくむたとへあり、

○みがきくたせるかたなどは候まじく候されはとて云々、　くたせるは腐の字なり、すみてよむべし、くたせるとは、もの丶過ぎたることとなり、こと〴〵しく、みがき過ぎしは女しからず、さうあればとて、また艶なるかたにとられ過ぎて、一首の心、たしかならぬはあし丶となり

○たましひ、　歌のこ丶ろをいふ、

歌の姿おもむきは、よるのつるにこまかに申して候、御覧候へ。あやまりて、古今新古今などの歌は、覺えさせおはしまし候へかし、とすゝめ申し候しを、ものうげに思しめし候し程に御心、くるしく候て、しひても申し候はぬ、かまへて、御年の加はり給ひ候はんにつけても、御心に入れて、そらに覺えさせおはしまし候へ、

○よるのつる、　夜の鶴はすなはち又尼公の作にて、是よりさきに、御息女へかきておくられしものなるべし、○あやまりて、　卑下の詞なり、○古今新古今などの歌は云々、　古今は歌の本體なり、新古今は此時近き御代の勅撰にて、専ら行はる丶ものなれば、必、そらにて覺えたまへらるべし、と勸めらる丶を、年若ければものうくせらる丶なり、○御心くるしく、　これもわが心ぐるしきにて、そのことさきに云へる如く、文のしどけなきなり、

源氏、世繼など、さるべからむものをば、ひとわたり御覽じ候べく候、

○源氏世繼　源氏物語、世繼物語なり、世繼は則榮花物語の名なるよし、水戸安藤爲章の考あり、赤染衛門の作といふことも非がごとなり、其論事しげゝれば、こゝにいはず、

箏の琴はわきて、あはれなるものゝねにて候、五の年より、ならはしそめ參らせて候へバ、かひ〴〵しく、七にて御いまゝゐりの夜も、院の御前にてひかせおはしまし候、また八の御年とおぼえ候、春宮の御琵琶にあはせ參らせなど、すでに、御名をあげたる御能にて候しかば、いよいよ、上手の名をとり給ひて、ひかせおはしまし候べく候、

○箏の琴、十三絃を、箏のことゝいふ、○わきてあはれなるものゝねにて候、いろ〳〵ものゝ音の中に、こと更に面白きと思ふなり、○七にて御今參り、七歳にて、内へ參られしなるべし、○院の御まへ、仙洞の御事なり、○すでに云々、既とは、過ぎさりしことをいふことばなり、此時に名をあげたまひしうへは、いよ〳〵上手といはれ給へとあり　（未完）

上杉家より細川家に遺したる書面　楫取男爵寄稿

(前略)別箋は、頃日故紙を採し見出し候に付、御手許に廻はし、女鑑に記載有之度候、右は上杉家より細川家と、新婦人取組緣談の節、協議

書に有レ之、三十有年前、肥後藩士宮部鼎藏なる者より、吉田松陰に相示し、松陰より老生に廻し來り候を、今日見出し候故、之を以て事實之有無を、上杉茂憲伯に相尋候處、如何にも相違無レ之由、答辨を得申候、扨て目今驕奢の風を養成して節倹之慣習は地を掃候姿と相成、此の協議書之如きは、婦女子之風習上のみならず、社會一般項門一鍼とも可二相成一書類に付、御目に懸け候、可レ然注解を貴兄被二書添一候而、記載有レ之度、爲レ其草々不備、

揖取

御内談之大旨

一此方勝手向不如意に付、嚴敷省畧相用、格外之仕來を以、取續罷在候處、萬事質素節倹を執守、奥向も右に準、御察外甚手狭にて、萬端御不自由之御事に可レ被レ成候へ共、御入輿の上は、都而此方家風に御隨被二成下一度、尤被二召連一女中之儀も、此段は兼而被二相心得一候樣仕度候事、

一女中向之儀は此方に而は國元諸士之妻子共之內、老女始役女等被二召仕一候處、至而人少に而、次女中迄、漸拾二三人に御座候間、仕來之通御附被レ進被レ下候へ共、御馴染不レ被爲在者共計、御取扱申上候而は、猶更御不自由に可レ被二思召一候間、御入輿之節御供之女中貳三人、御模樣次第其儘被レ差置可レ然、尤追而此方より御附之女中共え、御馴染被レ爲レ附候はゞ、漸々爲二御引取一被レ下度候事、

但被二召連一女中えは、御入輿之日より、此方にて扶持方擬等被レ遣候事

一男子向之儀、御附人は無レ之樣御心得被レ下度、尤

此方より男子向御傳役御用人御醫師其外家風仕來之通御附被㆑進被㆑申候事、

一前々より表奥共、平常着服上着之分は、綿衣着用之家風に御坐候間、後年御入輿之上は、奉㆓恐入㆒候へ共、御上着は御綿衣差上可㆑申候、尤被㆓召連㆒女中向之儀は、尤以㆓綿衣㆒着用、此方女中同樣仕度候事、

一御平常三時御膳之儀も右に準じ、一汁一菜に而差上候、是又同樣御心得被㆑下度候事、

但御祝事等之節、臨時取量差上候事、

一御熟談相濟候上は、表立家老使者を以、御所望可㆑仕候に付、右爲㆓御挨拶㆒御同樣、被㆓仰入㆒可㆑被㆑下候哉、猶委細は追而御懸合可㆑仕候事、

一右相濟候上は、來月中にも願出、進退之方被㆓差支㆒、有㆓御座㆒間敷候事、

一御願濟之上は、御双方御幼年之御事に付、御引移御婚姻迄、數年御間も御座候間、其内廉立候御附屆向等無㆑之、都而御手輕仕度候事、

一御仕向之儀、是迄何方樣よりも、五包ツヽ御差廻に相成、尤御土產等は一切不㆑申㆑受候事、

右之趣委細之儀は、追而表立御懸合可㆑仕候へ共、先打明一通り御内談に相及候事、

右書面之儀は、此度細川樣、上杉樣御取組に付、上杉樣御用人より、細川樣御用人迄、御内談之由に付、態本藩宮部鼎藏より、借覽之寫、

編者いふ、衣服に飲食に、奢靡を競ふなる當時よりこれを觀る時は、數十萬石を領する諸侯の家に於て、かゝる質素の掟ありしといは

い、殆、信じがたき程なれど、これやがて、當時の諸侯が、一國一藩の父母と仰がれ、士民を手足の如く使用して、怨むるとなからしめたる所以なり、人は人、己は己、天災時變にあひて、凍餒を訴ふる同胞あるも、聊意とする處なく、舞蹈絃歌徒に日を遣るが如きもの、いかでか、人を服せしむるとを得ん、人を服せしむること能はざるもの、富を持することも亦久からざるべし。

月の異名證歌

菊の家かをるぬし、女鑑第十四號に、月の栞を出だされる、おのれも、嘗てその異名を集めしものを、ある隨筆より寫し置きたれば、貴社に投じて、その足らぬを補はんとす、

遠山　操

正月、む月は、月の栞に說かれたる如くなれども、又一說に、むす月にて、發生の始をいふとあり、

六百番歌合

む月立つけふのまどゐや百敷の
豊の明のはじめなるらん

異名、佐美度利月、小綠の意か、

紀　貫之

年くれてさみどり月にありぬれは
ところさへなし小松ひくまの

初霄月、

後鳥羽天皇

雪は猶ふるとしながら立つはるは
さえにしまゝのはつ空の月

霞初月、　　　定家

今日も猶やま風さむみふる雪の
　その名ばかりや霞そめ月

初春月、　　　家隆

かすみたつ初はる月の朝日かげ
　のどけき色やそらに見ゆらん

久禮志月、　　　讀人不知

くれし月千世かゝるらん初くさの
　また見るばかり年はこえつゝ

年端月、　　　讀人不知

梅もはやさかりなるらし年はつき
　名もめづらしく成にけるかな

二月、きさらぎは、月の栞にとかれたるよりは、氣更來にて、生氣更に發達するをいふ、と云へる說、よからんか、　　　家隆

きさらぎのまだ朝霜は置ながら
　生もなづまぬやどの若草

異名、字米津佐月、　　　友則

うぐひすの通はぬ里の宿はわらじ
　花ざかりなるうめつさ月に

小草生月、　　　顯昭

みどりなるげに空淺し小草生ふ
　つき待ねたるむさしの丶原

梅見月、　　　有家

とふ人もなき故鄉の梅見つき
　風のなさけを袖にしるかな

雪消月、　　　讀人しらず

年こえて春ともみねず富士のねの

雪さえ月のころもふれゝば
読人不知

梅津月、
大空のおとやしるらん梅津つき
いつくに聞も風にはふころ
俊頼

三月

君がためやよひに成れば夜つまさへ
わべの市路にはゝこつむなり
友則

異名、佐波奈佐月、
ふる里へかりもなきつゝ歸るなり
さはなさ月に春やなりぬる
後鳥羽天皇

花見月、
うすぐもり空もひとつの花見月
なべて心もわくがれぬらん
定家

櫻月、
なべて今さかりと見ゑて櫻月
うす陰りなる四方のやまの端
家隆

春惜月
数ならぬ身ともおもはず日を重ね
暮行くころの春をしみ月
読人不知

花津月
はなつ月花より後の名のあらば
むなしく我は袖濡れぬべし
読人不知

夢見月
櫻ちるはつ瀬の山のゆめ見月
あらしの花のゆきのなか宿

（未完）

蜑婦の奇名

宿雲懶夫寄稿

能州輪島に海士町あり、全戸百八十戸、人口八百六十六人、内男四百〇五人、女四百六十一人、共に七十一姓あり、（明治廿年之調査）海上輪しまを去る西北十八里にして、一孤島あり、舳倉島と稱す、年々立春後、十八夜頃をトし、漁父一家雞犬相携へて、彼の島に移住し、以て漁業に從事す、秋季彼岸に到りて重ねて歸住すと云ふ、蓋し三冬の風波を避くるのみ、漁民常に常人と交通せす、別に一乾坤を成す、故に其名字もまた、一種奇なるものあり、今茲に記して、一粲に供す、

みる　たせ　きこ　ゑの　きし　やせ
いわ　きの　せゆ　しを　なさ　さう
さて　とん　かる　すら　こへ　たよ
みゑ　もよ　みさ　とん　みせ　とう
よん　して　きも　さよ　とよ　さり
きと　きい　きさ　りよ　りま　もき
めい　みて　きわ　まん　きれ　こせ
ろん　よせ　くさ　りさ　のさ　きり
りく　めり　りま　わよ　めさ　そは
りめ　はほ　已上

海士に一種の唱唄あり、其の音頗る麗涼にして、他の歌妓輩の擬すべからざるものあり、一夜麗涼、一種の唱歌を聞く、恠みて傍人に問ふ、果して蜑婦の唱音なりし、其異なる知るべきあり、嗚呼、彼の蜑婦の生涯を、孤島風波の間に送り、終に一唱の漁歌に、其の辛苦を慰するを思はゝ、世の玉堂金屋の佳人、平生裝奩の費、其の幾分を減らして、責めては慈善博愛の資に充てさせられんとぞ、

寒紅梅

中村花痩

其六の上

佐保姫が密と吹く風に、羅衣褫ぎ取られて、朝々の寐覺顔可笑しかりし花の、十日と待たず散り敷て、元の土塊に還り。老を急ぐ鶯の聲哀れに、若芽の緑、寐過して靄曳く眼を洗うて清しく、今日と明くれば、過ぎし昨日は夢の浮世なりけり。流るゝ水を人の身に比喩しは、實とや。月と越さぬ前は、絶えず遇ひたりし八彌が面影、今は土饅頭の下に、手向の露の一ト滴を吸へど、現に顯ずるは、その冷しき眦、その引緊りたる口。似つ合しき年頃の青侍を見る度に、それかと斗り懷かしく、胸に餘る事を案ずる毎に、在りたらばと戀しく。この世に無き人を呼べばとて、還り來るにもあらずと、思ひ絶えんとすれば、生憎く昔のみ忍ばるゝ痴愚ましさ。口にするものに味なく、眠る枕は頸に痛みて、兎角に樂しからぬ心、信行我から叱り勵ませど、われから氣の結ぼれて、われから心の朽り、今宵も寐所に入りたれど、寐られぬまゝに繙く軍書、はしなく精神の籠りて、讀み行く數も覺えず、時の經過も知

らず。眠らで更す夜は遲く、知らで過る夜は早し、精舍の梵鐘、指折れば十二時は過ぎたり。

草木も眠るなる眞夜中過ぎ、人の來る氣配もなくて、後の襖に衣觸る音、不審と耳を立つれば、やがて襖は自分と開きたり。細少の油斷もならぬ時世から、飼犬に手を嚙るゝことも珍らしからず、味方と心許せしものは、案外に敵の武士なりしもあり。信行膝近の一刀に手を掛けて、開きたる方を顧視けど、短檠の穗口己が姿に遮りて、白地にば見透かせず、只黑き者蹲踞るばかり、敵か味方か、人か物か、確かにそれと定めがたし。眉少し蹙めて聲少し高く、誰ぞと咎むれば、枝移りする鶯の聲して。勝奴にて候と云ふ。火先を外してつく〴〵見れば、開けたる襖の彼方に坐り、敷居一つを禮儀の垣として、夜目にも雪の兩手を突き、濡れ烏恥かしき髮毛のみ見せて、俯視たる顔は擡げ得ねど、見覺の衣裳の摸樣は、名乘りたるごとく、正しく勝なり。深み行く夜に、婦女の身の只獨り、忍びやかに伺候たるは、事あるでとく覺え、勝にてありつるか、先刻に暇取らせつるに、まだ眠りもせで、深夜に見えしは何の用ぞと。怪しみて問へば、勝は首靜かに擡げて恐る〴〵、殿にお願ひ申

たきことの侍りて、更け行く夜にそゞろ驚かし申ぬ。といふさま、何か思ひ入りたるやうなり、八彌打たせたる後は、勝に顔合する毎に、心の中の推計られて可憐しく、氣強の女とて淚は見せねど、笑ふうちにも打ち濕りたる面影の見え、羽二重張りたる頰に、薄き皺の寄せたるは、人こそ知らぬ夜の枕紙、濡したらむ痩せならん。坊主憎くければ袈裟も、といふ例言の裏を返せば、坊主可愛ければ袈裟も可愛く、子のやうに思ひし八彌が、未來の妻のみならず、八彌拾ひしと同じく、京の片田舍の草深き處より、計らず尋ね出して、坐側に使ひ馴らせし勝なれば、他の侍女どもとは違ひて、是も亦子のやうに最惜しく。さればこそ數多き侍女の中より撰り出して、可愛き八彌が妻と呼ばせしに、葛城の神の祟か、出雲の妬かは知らねど、暖かき鴛鴦の夢は、畫襖にのみ記念を殘して、はしなくも片羽、殺ぎ離されし哀れさ。なまじ我から進みて、この緣結ばせずば、憂苦はまづ知らぬ未通女に、この愁歎はさせまじきと、その頃の喜悅は、此頃の困苦。八彌生活たりし時より、不憫は十倍も增して、勝が心慰め遣ることゝいへば、火の中水の中とても、辭退はせじと思ひ定めたるに、その勝が今此處に來て、何事か知らねど、願ひありと言はれては、追

風見掛けて張る七合帆、是方より進みても聞きたし。我に願ひありとか、其處にては遠し、最少し近く。と云うて、信行讀さしの書冊を鎖ぢ短檠搔き立てゝ、躰を向き替ふれバ、勝は敷居の閾越して、徐かに襖を閉ぢけり。信行此方より打ち解け、眼元に笑を持たせて、後の机に肱を預け、願用とハ、いざ聞かうぞ、語りやれ。　勝は何羞かしきか、左右なく云出さず、舌の先に言葉の乗るは見えても、唇動かすのみにて、又しては呑み込み、窺むやうに信行の顔を覗ひ、掌柔らかに疊を擦り、我から澁り果てし乙女心、ちよろ〳〵水の小石一ツ越しかぬるいぢらしさ。姿を見ては強ひて問ふも辛らく、水道探すを待つ間の拳、遣り所もなくて、膝頭輕く叩いて居るも、なか〳〵にそれといふ緒口も見えねば、信行笑ひ聲少し雜せて、勝如何にしつる、云ひ損ねつるか、耻かまず聞かせよ、心遣ひは入用に。といふをやうやくの添竹に、頸まで赤くさせて、一心になれば自然と口早く、願ひとは…………、勝奴に永の御暇を…………。と思ひ掛けず湧き上る清水は、信行の笑顔を押し流して、眉際に皺を寄せ、何と云ふぞ、暇をとか。　堰一ツ越せば苦しくはなく、後に觸るものもなけれど、信行の氣色量り兼ねて、首は垂れしをそ





の儘。はい、永の御暇を………。と平伏せば、信行が眉の皺、一際數を増して、身体斜に前へ突き出し、勝、異なことを聞くものよ、只暇とばかりにては、許すまじ。隱さず云うて見よ、勝その譯は。はッその譯は、その譯は。

暇乞ひまつる譯は、聞かせ給へ、よし長くとも。まだ夫と呼び妻と呼ばれて、朝三暮四同じ家に、起臥したるにはあらぬも、固めの盃、三たび唇に觸りてより、定めし彼の樣も、吾が婦とこそ覺さめ。此方も神かけて、吾が殿と思ひしものを、無情き一ト嵐の物妬みは、生木の幹只中より二ッに裂きて、十萬億里の中垣を据ゑぬ。枯れて行きし身の無念思ひやれば、生き殘る身も枯れや果つべき。去る夜半の騒動、曉方に奥殿へ聞えし時は、晴れ渡る空に俄然の雷霆、轉び落ちたらむやうにて、眼暗み耳聾ひ、ひたすらに驚きて涙も浮かまず。おのれ仇讐、その儘にはと心跳り上る頃には、落ち散りし短刀に、早くも仇讐の名は知れぬ。今にも縲絏の罰に遇ひなば、女ながらも申乞ひて、新墓の手向草にせむと思ひしに、あだ波は干潟となりて、取り調べ給ふ氣色もなく、打ち捨てし儘に濱の花貝、一日二日と過ぐる齒痒さ、いかにしても堪へ得で、さりげなく聞いて見れば、進みて調べ給はぬ道理、よく解明

りぬ。道理は道理と思へど、無情きに募るは戀ばかりかは、心狹き女の中々に早りて、安然に過ごす仇讎の樣子を聞きて、まだおぼえぬ癪といふものを、知り初めけり。人に面を合す時は、さらぬ姿に繕ひなせど、獨寐る夜の襖は、口惜し涙に襟を汚して、賤の汐垂れ衣、乾く間とてはなく、夢路に迄神の名、佛の名を稱へて、片時も早く仇讎の口、開かさぬやうなる證據を、惠み給へと祈りたる甲斐か、斗らぬ罪人より脈を引きて、仇讎の名は最早動かすも動かぬ、佐久間七郎左衞門。嬉しや是にて、胸の痞も散ることよ、と喜びしは束の間の短かく、聞けば七郎左衞門は、召狀受取るが早く、その夜跡を晦まして、籠に閉ぢ込めし鳥れ、限りも知れぬ雲井の空とやら。勿体なきことながら、その時は譯もなく殿を怨み申、はては世になき入彌が魄魂も、云ひ甲斐なしと思ひき。

此頃とり〴〵の噂に、七郎左衞門此地を奔り出でたる後は、美濃に山越して、齋藤道三を託み拵へ、深く潜みたりといふ。幾度聞き直しても違はねば、確かのことなるべし。七郎左衞門尾州一國に忍べば、例令土を潜り空を翔るとも、殿の御威勢に狩り出して、髯首胴より二ツにするは、譯もなきことなれど、他處の國、しかも鎌

研ぐ國に逃げ入りては、殿武勇はましますとも、むざと手は附け給ふこと難し。難きことゝて、知らぬ顏に見過しては、人は如何にわれ、勝が節操は立たず、斯る時こそ、なまじ一人こそ便よけれ。覺束なくも手蔓探り出し、齋藤が館へ入り込みて、折もあらば七郎左衛門に近寄り、只一ト刀怨まば、無念を呑みて死にし、八彌が宙宇に迷ふ亡魂も、嬉しう成佛すべく、夫討たせたるこの胸の雲も、日本晴のすべし。」八重葎繁る、鄙人の中より拾ひ上げ給はりて、折かゝみの禮義、さては武藝の一手さへ敎へ給はり、得難き夫も賜はりし御恩、萬分の一ト滴だも酬し參らせで、我儘氣隨の暇乞ひ、恩知らぬ畜生、憎くき下卑と怒らせ給ふは、格期の前なれど、この身知らず顏しては、八彌の仇讎は、誰も討つものなく、近き今こそ、誰も憫然と思へ、疊み重なる月日は、裏はらに人の心を薄くして、明けむ年の今頃は、八彌と不憫がるものは、一人も有らずなるべし。さありては、苔蒸す土の下に住む八彌が本意なさ、思うても見給へ。この譯道理と聞こし召さば、快よく勝に暇を給はりて、憎き七郎左衛門。覘ふことを許し給へ。首尾よく事を仕果つれば、髯首下げて戻り、八彌が墓印、仇讎の鮮血に洗うてのち、この身骨となるまでも、稀なる御恩に酬い、

我儕の御謝びもせむ、なれど若し可弱き力足らで、八彌が殪れし太刀風に、同じ無念の白露と消えもせば、生きての御報恩はこれまで、御顔面拜み申すもこれまで、殿萬年のその後に、あの世にての忠義は、八彌と二人して、盡しまつるべし。と常時の勝には變りて、言葉尻鈍く、聲の曇りは心の悲歎を洩せど、知らせじとてか、人無き方にのみ、顏脊向け勝なるもの、いぢらし。

文林

待時鳥　東久世通禧

今宵また月ばかりをやあがむらむ
待夜ふけゆく山ほとゝぎす

初時鳥　黒田清綱

ほとゝぎすなく初聲にあづさゆみ
春のこゝろは離れけるかな

阿佛尼　佐々豐水

子をおもふこゝろの鑑いざよひの
月影よりもさやかなりけり

礒浪　税所敦子

あらいその岩にあたりて砕けずは
波にも花はさかずあらまじ

獨述懐　小池道子

ほどふれば忘るばかりのうきことを

嬉しと人にいはですぎにき

新竹を　　尾崎すう子

たらちねの親にます子の若みどり
よながき竹のかけは涼しき

何事もおとり行く世にならはぬは
ことしの竹の影にぞありける

五月雨　　林甕臣

「つれ〲と降りくらして、しめやかなる宵の雨に」と、かの箒木の巻に書きすさびけん五月雨をやみなき宵のけしき、見るがごとし。紫式部が筆、身にしみておぼゆ。　げに五月雨ふりくらしたるゆふべばかり、つれ〲なるは、なかりけり。

「つれ〲」は潰れ〲といふ語の約まりたるにも、あるべし。　胸つぶらはしう心晴れず屈しおもはるればなり。　また「さみだれ」は、空乱れといふが、約まりたる語なるべし。　空は、晴れたるを常とするに、ふすま張りたらんおぼえて、雲にとぢはて、たゞ降りにふり、物みな水にひぢ、世は、さながらつきぬらんと肝でゝろうせて、いつ晴れぬべくも、見えず。　いつを止みぬべくも、あらずかし。

筑波嶺もふじの高嶺もちゝぶねも
いつ見しまゝか五月雨のそら

あしたは、軒のしづくに夢さめ、ゆふべは、雨だりのおとのみ聞きくらしつゝ、おもへば、降りそめし日より、けふいくかにか、なりぬらん。　おもへば、いまいくか有りてか、空は晴れぬらん。

たれこめしいほの西窓まれにわけて
　咲きちる栗の花を見るかな
なほ胸ふたがり心さへ晴れやらず。　雨のおとおどろ／＼し。
つく／＼とながめくらしてさみだれを
　はれぬ空かとおもひけるかな

春を送る詞　　江崎みさ子

春といへば、まづ花といふことを思ひおこし、花といへば、先そのうるはしきことを思ふ。そのうるはしき花のかげに、思ふどち、遊びむつれたるこゝちは、又たぐふもののなくなむ。されば、その花のちりて、その春の暮れなむとするに當りて、誰かこれを惜しまざらむ。一年にふたゝびとある春ならばとは、誰も思ふならむ。さるを妾は今年のみは、その早く暮んことを願ひ、今やそのくるゝをよろこぶ。世の人あやしと思ふらむ。いで、そのゆゑよしをしるして、明治廿五年の春を送る詞とせむ。

ことしは年の始めより、もがさといふもののおこりて、壯なる男女、命をうしなふもののいと多かり、さらぬも、目つぶれ耳ふたがりて、その人とも見わかぬまでに、面がはりせしものかずしらず。これら幾多の人は去年にかはらぬ花を見て、いかなる感情をかひきおこすらむ。こを思ひて、恙なき身も、あはれにかなしく、花見むとしも思ひたゝで、すぎにき。これその一。

春の初め議員撰擧と　かいふことありて、南の海、

西のそら、いかなることをか爭ふらむ、女の身の知るべきことにはあらねど、昨日はかしこにたゝかひあり。今日はこゝに人殺あり。農は田を耕す能はず、商は業をいとなむ能はずと。朝な〳〵新聞紙の報ずるにも、この大平の御代に生れあひながら、私にかゝる爭をして、生をうしなひ、きずを被るのみならず、上は恐れ多くも　陛下の大御心をなやまし奉り、下は罪なき人を害ふこと、いくばくぞや。心なき身にも、いとあさましく覺えて、花見むとしも思はえざりき。これその二。

古より未だきかざりし、をとめ子の顔きるといふこと、この春よりぞはじまりける。大方女のよすがは、みめかたちによりて、定まるものなるを、いかに心の狂ひしにもせよ、傷つくるとは何事ぞ、こを傷つけて、おのれに何の益かある。おのれに何のたのしみかある。これ實に、をとめ子の一生を不幸の淵にしづましむるものあり。思へばにくきこの狂漢。思へばあはれこのをとめ。かの花のさかりを、ふりくだす雨にも、思ひよそへられていとかなし。これその三。

三十年あまりきかざりしを、舊曆曲水宴の翌日、都はみな銀世界となりぬ。しかのみならず、あるは暖く、あるは寒く、大方の氣候不順なりしかば、いたつくものいと多く、妾のやからも、この災にかゝりぬ。さればいかでか獨り花見て樂しからむ。これその四。

四月九日の夜、風はげしく吹きて、靜ならざりしに、丑の頃より火おこりて、神田より日本橋の方

に至る、五千戸ばかり、一夜のほどに塵灰となりにき。あるは煙にむせび、あるは焔にまぎれて、死せしもの十八人。あるは身一つは、からくのがれたれど、資財をとり出すに及ばず、萬の寶、さながら灰となりにき。都の火はめづらしからず、かほどの大火も、時にはあることなれど、かく人の死せしとは、ふるき昔はいざしらず。この年頃にあるまで未だ見もきゝもしつることなきを、その父母妻子のかなしみは、いかばかりならむ。家をやかれ、財をうしなひ、あまつさへ、かゝることあらむには、世に生きのこるこゝちは、なさゞらむ。さるを、いかでか花見てあそぶこゝろあらむ。これその五。

あはれ〳〵、この春は、かく種々のかなしき、履歴を殘して、くれにき。妾のひとへにあらたまる夏をまたむも、全くこれがためなり。さあれ、これ決して春そのものゝ罪にはあらざるなり。多くはこれ、人爲の災、夏來とも猶たのまれぬものを、あながちにまち渡らむも、又おろかならむにこそ。

喫新茶詞

女子高等師範學校四年生
飯島きん子

けふはそらくもりて、いとしづかなりければ、けさよりまどのもとに、歴史をひもときぬ。さしてゆくの御歌をよみ參らせては、當時のみありさまを想像し奉りて、卷を掩ひてなき、楠氏の忠孝、足利氏の暴逆など思ひて、あるはなき、あるはかなしみいかりなどして、われながら、あやしきまでふけりたれば、頭もおもく、精神もいとつかれぬ。

折しも、いもとはしり來て、姉上よ、母上まち給へり。はやう來ませと云ひすてゝ、またはしりゆきぬ。何事にかとて、いそぎ御居間に參りけるに、母上いと御機嫌よくて、けふあん園ある新茶を試み侍りぬる、風味し給へとのたまふ。園の新茶は、母上の御なぐさみに、御手づからつくらせ給ひけるなり。されば、うれしさも一しほにて、母上の深き御惠と共に、おしいたゞきぬ。にほひいとたかう、あじはひいとよく、仙薬をものしたる時の心志もかくやと、おもはるゝばかり、精神さわやかになりて、千歳もいのちのびなんこゝちせしこそ、わすれがたけれ。

姫島日記(つゞき)　故野村望東子

あるあしたに、

冬がれの草の末にすがりつゝ
　またおきあかす露のひとたま

おのづから心ひとつのかくれがは
　そことしりつゝ住みがてにして

うき月日も、いつしか過ぎつらむ、はや霜月になりぬる、ふゝみたりし梅が枝も、今朝ひらきそめたり、

きられてもはゝゑむ瓶の梅の花
　さてこそ人もあらまほしけれ

あくるあしたに、

月たちて一重ひらきし瓶の梅
　ひをよむばかり今朝はふたひら

又そのあくる日に、

昨日までひをかぞへこし梅の花
けふは三日ともいはぬかずかな

かひなく、物をのみ嘆きくらすも、罪ふかく、あさましとて、はかなきことゞも、いひくらして紛らはしつゝ、けふあすとすぐすに、ある人に、

冬ごもりさく梅とても心せよ
春めく空のまことならねば

あらかりし凩のすさびに、折れふしたらむ、うめ櫻のありさま、さだかにうちいづる人もなければ、さすがに、うき音信もさだかに聞かぬは、こゝろ苦しくて、へだてなき番人に、樂がきのすさびに、

夜嵐のねさへからしゝ梅櫻
花さく春のくるもまたずて

うべに寒かりつるな、よべはせふりの峯、しろう雪ふりぬなど、人のいふをきゝて

わがみには寒さのみこそしぐれけれ
目にはせふりの山のはつ雪

はた、此のころ、二人ばかり、ゆゝしきさまに、なりはてつるよし、ある人、ひときかぬ間につげぬ、まことあきれにあきれはてゝ、ことばもなし、かの一人のをの子が、さきもせで、嵐にちるや山櫻とかいひつるよし、ことにあはれに、かなしく憂れたし、

咲もせでちるさへあるを櫻木の
くちきながらに殘るおもなさ

かめの梅は、のこりなく、ひらきたるもかなしくて、

折れても咲やすられぬ梅の花
　心きよくもちらんと思ひて
埋木はさくらが中にまじりても
　花し咲かねばちる時もなし
今はたゞ、便りなき心地のみせられて、つぶ〳〵と、獨言のみこそ、せられしか、とほき島のひとやに、流されゆくべく定まりたれば、いへ人ども、かなしびに得たへず、いと忍びやかに、夜ふかう嫁なるものなん來たる、ひさしう絶えたるに、はた永きわかれのこともつきせず、あかぬ心もいみじう、切なるに、鳥のこゑのきこゆれば、よのさが畏しとて、わりなく往んとするに、
　鳥がねのにくさもしらで老にしを
　　思ひもかけぬ別にぞわぶ

女かへし、
　よひ〳〵にまつ曉の鳥がねも
　　君に別るとにくゝもあるかな
うま子なん、今宵母もろともに、しひて來んといひたりし由なりしを、いよ〳〵その子はつゝましかるべしとて、とゞむる人ありて、來ずなりしに、いみじう悲しびて、いひおこせける、
うま子が、
　くもりなき身におほはるゝ浮雲は
　　いかに立とも晴ずやはある
また、
ひと度はよせくる波もかへるあり
　盈てればかくるならひあるよは
など打見るにも、せきあへねど、わざと、

よせかへる波にたゞへて身をしれば
　さわぐ心もつひになくめり

いかでひとめ見てなど、思ひてこがるれど、かひなくうち嘆きたるに、かしこにも得たへやらでや、あくる夜深くしのびて、ゆくりなく、來たるこそ、殊にかなしさいや增さりて、とりも亂すべかりしを、からうじて、たへ忍びたる淚、いつの世にかつくべき、こよひも鳥のなく音に驚かされて、別るゝまでのこと、現氣もなし、はやあけの鐘さへなれば、心あわたゞしくて、

暁のかねのいさめを限りにて
　わかれがてなる別れこそすれ

神のむかしの鳥のそらね、譬ふべくもあらず、畏きものから、忍びたてまつられぬ、さて明けはてても、名殘のゆめ覺めやらで得たへず、こゝろ弱くもいひつかはしける、

あはずしてわかるとさへに思ひしを
　又も見まくのほしき君かな

つひに行道はさりとも老らくの
　いきのわかれはなき世ともかな

雜報

●妻と夫　夫は、外の事をすといへば、我も亦、内の事をす。夫のすといふ外の事も、尊き官位に居て、國の爲、民の爲といへるが如き、重く大なる事ならば、さまれかくまれ。實に、聊けき、人並の生活のわざに過ぎず。我が司る内の事は、家こそ狹けれ。人こそ少けれ。やごとなき人々も、自したまふわざにぞある。夫は、賤しき者のするわざをして、我は、貴き人のすることをす。我、いかでか、夫に從ふ義務あらむ。夫に事へよといへる女の訓は、我等には應はぬなめりと、自、横さまの理をかむがへいでゝにや。しひて、我が良心を欺きつゝ、いらなくふるまふ者、世にいと多し、夫外へ出づる時にも、外より歸り來し時にも、送り迎へて、行く先を問ひ、暑さ寒さにつけて、ねぎらひ慰むる事をもせず、火鉢の横座とやらに、長き烟管に、烟草くゆらせつゝ、すまし居て、出で行く時は、「勝手にせよ」。歸り來し時は、「何をひまとりしか」と、いはぬばかりの面もち、にて、つれなくあひしらふ。まして、みづから、用事あるをりなどは、たゞに、見むきもやらず、「うるさし」などゝは、口にさへいひいづめり。あはれ、かかる、氣位といふ位のいや高き妻の尊に事へられ、否、使はれて、敎へもせず、誡めもせぬ夫の、心よさ。さては又、才智の短きには似で、物言はぬ口の下の長さよ。

●姉と妹　「姉君、明朝、疾く目ざまし給ひなば、妾をも起こし給ひてよ。人の來ぬさきに、同じく學校には參り侍らむ」と、十二三なる少女が、

いとやさしき聲していふに、「心得つ」と答へぬ。つとめて、姉は、早う起き出でつ。さて、昨宵の約束の如く、妹を起こすかと見れば、如何に思ひけむ。ひそかに、身づくろひして、母にこひて、我ひとり、疾く朝食たうべ、わりごの用意して出で行きぬ。程なく、妹は、目さめて、姉をうらみつゝ、亦いそぎたちいづ。かくすること、度かさなりければ、妹も、つひに、姉の心をや知りけむ。床に入りても、眠る事をせで、きそひ起きつゝ、出で行けり。妹は、姉にも優らましと思ひ、姉は、妹に劣るまじと、かたみに學問を競ひてこそ、かくはするなれと、その兩親は得意顔に語りいでつ。學問をはげむは、誠によみすべし。これが爲に、姉妹のしたしみを失ふとは何事ぞ。さるにても、いましめむとはせで、かへりて、人にほこる親等の心よ、その子を、愛しとは思はぬにか。

●人の欲には限なし　冬は、寒くして堪へられずと嘆き、夏は、あつくして凌がたしとつぶやく。帶を得れは、衣を思ひ、衣を得れば、頭のものをおもふ。人足ることを知らざれば、この世のかぎりうれへの内にをらざるべからず。冬の寒さも三月がほどにすぎず。夏の暑さも、百日には足らざるなり。憂へしものも、憂へざりしものも、寒暑の苦を忘るゝは同日なり。一つよりは二つ、二つよりは三つと、漸く望を増長すとも、時いたらざれば、叶はぬ事ぞかし。徒に欲を増んよりは、其分に安んじて、おのがつとめを、怠ことなきにしかざるなり。

●身をもちて人を導くべし　おのれ、行を正しくせずして、人を、善き道におもむけんとするは、さながら、盗人の、人に、他人の物盗むなと敎ふるがごとし。よの常の婦人を見るに、夕は、たは

れたる小說、あるは、演劇語に夜をふかし。朝は、日たくるまで寢床にをり、やがて、しぶ〳〵起きいづるや、まづ、顏洗水なしとて、下女を叱り、朝餉おくれたりと、又、下女を睨まへ、是れも惡しし。彼も善からずなどつぶやくめり。かくては、いかでか、思ふがまに〳〵人を使ふを得べき。人をよく使はまく思はゞ、已まづ之れをなせ。人の足らはぬは、己、足はぬ所あるが故なりと知らば、腹立つこともなく、家の內も安らにをさまりぬべし。ゆめ自らつとめて、人をつとめしむといふ心忘るべからず。

●朝な夕な　文机にのみ凭り、明けては、國書を手に放たず、暮れては、漢籍に眼をさらし、束の間も怠たることなく、たゞに已が通へる學校の業だに勉め勵みなば、孃等のなすべきわざは、盡したりと言ふべきか、あらず。もとより、孃等は、その身高貴に生れ、かしづくに侍女あり。つかふるに奴婢あり。事として足はぬはなく、物として滿たぬはなし。かゝれば、他に爲すべきわざはなきが如くなれども、苟も女とうまれたらんには、おの〳〵、身分に應じて、必す爲すべきわざはあるめり。されば、夜あけなば、つとめておき、年老いたるをなぐさめ、幼きをいたはり、さては、父母の居升方の床を斂め、塵をはこび、日入りなば、亦老いたるをなぐさめ、幼きをいたはり、床をのべ、事畢へて後々に、學の業を勉め、裁縫の事を勵みてこそ、明治の聖代に、學びの業修むる、眞の孃等とは云ふべけれ。噫、孃等、嗚呼のしれごと、一概にな捨てたまひそ。

餘芳

みくるまのあと（つゞき）

車のけむりも雨にうたれて、下はふさま、さなから雲の中を行こゝちす。關か原あたりは木立しけくて、つねたにをくらき山かけなるに、雨と煙ときりふたかりて、はりのまとも、紙をはりたるこゝちす。くるまのうちに、かねて、ともしたる燈のひかりのみそ、時えかはにかゝやきたる。煙のひまより、松杉あとの、風にうこくさま、をり〳〵はのかにみゆる、いとものすこし。米原にいたれは、うみのおもて、すこしあかるくみえそめて、いきいつるこゝちす。こゝには、學校の生徒も、ことにおほくみゆ。行まゝに、雨雲のたゝ水のうへにつくはかりに、みゆるひまより、舟なとのゆきかふさまをかし。瀨田のわたり過るほと、石山も、雲のたえまにみえかくれして、さたかならねと、なかなかに、よきけしきなり。早蕨のすけ、

雨くものたちかさなりてかゝみ山かけはかりたにみえぬけふかな」とよまれし

も、このわたりのことなるへし。馬場にて、しはし瀛車とゝまりぬ。わかたのつか

さ人たち、いて迎へ奉る。これより、大谷の隧道にいれは、くらきよりくらき道に入るこゝちして、いといふせし。これをいつれは、京都もほとちかし。おもひなしにや、そらのけしきも、すこしあかるくなりゆく。今まてねふりたるやうなる人々も、そゝろきたちて、こわたかにものいふこゑ、いとたのもしけなり。まして、女房たちの、いかにうれしからんとそ、おもひやらるゝ。京都につかせ給へは、停車塲のあたりにて、例の花火のおと、うちしきりたり。けふりの中より、日のみ旗のあらはれいてたるは、をりからにや、こゝろもはるゝやうにおほゆ。汽車をおりさせ給ひて、みくるまにうつらせ給ふほと、樂隊のものゝねとともに、近衛のつかさ、みはたたてゝいてたつ。例のことなれと、ことにおほゆるハ、處からなめり。おはん迎へには、みこたちをはしめ、つかさ人たち、つかうまつりたり。道の左右に堤をつきたらんやうに、學校の生徒、かんつかさ、法師なと、あまたの人々、停車塲より堺町のみかとまて、なみゐたり。御所近き處には、華族たち、またふるき女房なとのみ、しれるもあり。御所につかせ給ひしは、午後六時三十分なりき。御所のうち、あにとなき板しきまても、むかしなつかしうおほゆるを、まして、はやくす

みなれし女房たちなとは、こといみもしあへすかし。たひらかに着せ給へる、よろこひ申して、皆おのかし〵の、やとりにつきぬ。おのかやとりは、宮の大夫をはしめ、あて人も、おのかつらも、いとおほくて、よろつたのもし。くれかたより、雲はれわたり、空にも、よろこひのけしきあらはれて、めつらしく、月のかはさへみゆ。六日、空はれて、いとこゝちよし。きのふかゝらましかはと、思ふもかひなし。みはしのたち花をみて、新樹のすけ、

　こゝのへのみはしのもとのたちはなはむかしのまゝのかにはひつゝ」。たゝことのやうなれと、をりにあひたるまこゝろは、いつもあはれにおはゆるそかし。おのれは、朝とく、久邇宮にまゐりて、御歌所長より、あつらへられたる、伊勢神宮の獻詠の歌とも、たてまつり、それより、うちにまゐることとなけれは、ひるころまかてぬ。けふは、すこしいとまあれは、日記なとも、かゝんとおもふほとに、したしき人とものつとひきて、さすかに、めつらしけれは、ゆふつかたまて、かたらひぬ。また空のけしき、わろくなりて、風あらゝかに、ひとむらさめのゆふたちめきて、おわたゝしうふりいてぬ。はれて後に、人のいひけるは、あられなとも、ましれりと

か。ゆふつかたよりは、又はれて月いとよし。よるの花もゆかしけれど、風のこゝちにたれこめて、ともしびのもとに、よを更しつ。
七日、ひかけさしなから、うき雲まよひて、朝風寒く、をり〳〵小雨ふる。さためなき雲の行來は、時雨の空にゝたり。かくては、花ものこりなく、ちりはてんとおもふに、いとくちをし。うちにまゐる道にて、北山をみれは、むら〳〵しろし。よへのあられは、雲なりけりと、今朝そおもひしらるゝ。今日はひるころよりまかてゝ、華族のうたの會に、桂宮にゆく。會長のみやも、わたらせ給ひぬ。當座の題は、こたひ華族にたまひたる、都春月、花前興といふことを、おの〳〵よみて奉る。おのれはやく、此會のために、おはせことうけ給はりて、京都にありし、ちなみにより、今日も、このむしろの末につらなるなりけり。ゆふつかたやとりにかへる。明日は泉涌寺、東福寺へ、行啓のおはせことあり。

をしへの庭

六月五日兼題　故郷郭公

（天地人の三ツなるはぬきたるほかはすべて原稿到着順なり）

天

忍ひあまり又とひきつる故郷に　むかし語らふ山ほとゝぎす　師岡須賀子

地

故郷となりてわれにし柴の戸を　おとつれかほになく時鳥　福木　稲子

人

ふるさとの卯の花垣にをち返り　鳴くや長柄の山ほとゝぎす　佐々有鄰子

古里に聲ふりたてゝほとゝぎす　なれし昔やこひわたるらん　西川　德子

いてしより年ふる里に歸りきて　聲あつかしきほとゝぎす哉　木村美津子

時鳥いかにむかしをしのひてや　よたゝ鳴くらん古里のそら　木村　彬香

あれはてし垣ねなからも故郷は　初ほとゝぎす今そなくなる　久保田律子

古のみやこはこゝとほとゝぎす　なくこゑしるきしかの古郷　松田　靜枝

五月雨のふる里遠くたちいつる　なこりになくかやま時鳥　松田　八重

心あらは名のらてすきよ子規　よに古里のあかつきのそら　松田　操江

ふるさとのむかしこひしく橘の　匂ふあたりにほとゝぎす鳴　稲田　春江

ねさめして誰かきくらん故郷の　空になくなる山ほとゝぎす　稲田　園子

故郷のむかしやいとゝ忍はるゝ　稲田　君子

こゑもらす也山ほとゝきす

とふ人もなきふるさとの立花に　植木　鋼子
昔こひてやなくほとゝきす

杜鵑たれにきけとかふるさとの　江崎みさ子
をかの松原をちかへりなく

さゝ波やむかしなからの故郷に　神尾　松子
聲あたらしき山ほとゝきす

すみすてゝあれたるさとに郭公　高井　孟子
誰にきけとかなき渡るらん

古里のむかしをなれも忍ふらん　勝家　貞子
やま子規をちかへりなく

すみすてゝあれし古家の軒に猶　廣田　留子
涙なそへそやまほとゝきす

立ちかへるわかふる里の夕月夜　師岡千代子
ほのかなるねになく郭公

ふるさとの軒端に月の影もれて　川井田さよ子
山ほとゝきすなき渡るかな

すみすてしわかふるさとの杜鵑　中村とも子
鳴くねを今は誰かきくらん

古をおもひいてゝやさゝなみの　水野　清子
ふるき都にほとゝきすなく

六月五日兼題　螢狩の記

天　佐々有鄰子

夜のものには大御代の光あまねき電燈とか洋灯とかいへる器あれば螢をあつめしはむかし語となりけれど學の友達二人三人にそゝのがされて逝水の上つ瀬は淺く下つせはふかし中つせにおり立ちぬ夕月の影山のあなたに落ちて大空に天のうき橋なせるがさとふきくる川風にちりみだれたるをうち落してうすものゝ袖につゝめばひかり通りてゆかしうなん

地　師岡須賀子

ふりつゝきし梅雨の空けふはなこりなうはれぬいと嬉しさに暮るゝを待ちつけて程近き川邊に螢狩せんとていでゆく道すがら吹きくる夕風の涼しき

に三ッ四ッ二ッ飛びくる螢のしるべ顔あるもをかし川のほとりは玉をちらしたらむやうにあるはたかくあるは低く此方のきし彼方のつゝみ草かげにとびかふ光いはん方なし扇もて打まねき〳〵捕へて籠に入るゝ女の童あれは遠く追ひゆく男の子あり數多とりえて誇りがほなるとりえでむつがるなど短夜のふくるも忘れて遊べるさま月なき頃の樂しみはしく物もあらしゝじおのれも數多ごにとりねて歸り來て文机の前におくに文字さへ見ゆるばかりなればやがてこを光りにて今宵の事どもけしきばかりほのめかすになん

人　　　　江崎みさ子

軒のあやめもくつるばかりふりつゞきたる五月雨もやう〳〵やみにたればはらゝら打つれだちて小梅わたりへ螢がりにものしつ里人の敎ふるまゝにある小川のほとりにゆけばかの宇治の光にこそ及ばざらめ天つ星の一時にとびかふがごとくいとうるはし早くより來りし人々ならむうすきもの張たる小さき籠に多く入れて歸りゆくめり里の童のうちそこあひてとびゆくかたをいとうらめしげにあがむるありあるはうちえてほこるもありけり妾も下の方にとびゆくを見てとらんとすればそは水に移らふかげなりと妹笑ふ妹とらむとすればそは草葉に置ける露ならずやと妾笑ふかくていと多くかりとりたれば樂しみは未だなかばなれど母君のまちますらむもいとほしくかつはこをはこらまほしぅ思ひしかばはらからをうながして歸り路にむかひぬ道すがら弟のかゝるなつかしき光をいかなればあしき神のなずらへにはいひそめけむとつぶやくもをかしさて家にゆきつけば母君門邊にたちてまちましぬいと多くをとてはめ給ふみなうれしとよろこぶ今の開けたる御世には瓦斯石油などありて燈にことをかゝねば學の窓にたつさふべくもあらずはたこをたよりに情はこぶひとしもなければとて庭の遣水にはなちやりぬ月なき夜軒ちかうとびかふさま目もあやに光すゞしくいとをかしうて

なむ

松田　靜枝

白妙のすゞしき袂風にふかせて月おもしろきまゝいさゝ小川のほとりにいたりぬみな月もはやくれ近かければにや數しれぬほたるいとさかりにて空なるは星かとも見ゆ草葉なるは夜さく花かとあやまたるうちはかざす手にふれて落るひかりの二つ三つ四つ水のまに〳〵ながれゆくはあはれいづれの草むらにたすけらるゝにか覺束なし唐土人がふみよむまどのともしびとなりしははやむかしの夢と消えはてゝあはれ今の代の螢のうらみいかばかりぞそゞろあるきの折ふしうすぎぬのふくろもたねばうす紙の中に十あまりとりあつめつるもあつさになやめる妹のこゝろ慰めむとてなん

福木　稻子

己れ過ぎつる日師の君より夏の休のゆるしを得ふるさとに歸りぬこゝは都より遠しとにはあらねどいとしめやかなる所なりけふしも降出す夕立にひるの暑さを拂ひ夕げ過ぎ庭の面に立出見れば前栽に生繁る葉櫻のあひだに輝く物ありひるの夕立の名殘の露に月影のうつろふにやと立ち寄りて見れば螢なりあなうれしとなに心なく見てあるに又かなたより三つ四つ飛くるもさそひがほなりいでや川邊に物してんと三四人のおとゝひと共にてとにうちはなど持つゝ門べに立出見れば今をさかりと飛立つ螢清く流るゝ水音に勢を得かあたこなたと飛ちりては又あつまりあつまりては又飛ちり其をかしさえもいはれずいとけなきものどもは打よろこびうちはあげつゝ螢のあと追まはり皆何れへかとびゆきぬ己も余りのおかしさに目もはなたで見てありしに夜たくるまゝにいよ〳〵あまた出來て柳のえだにとまるもありあるは水にかげうつし我れはがほにとぶもありてさながらほしのあつまれるが如しあはれ此川此螢を都の地におきたらんにはいかばかり人にめではやさるゝならんかゝる所にありてこそおのれらと田のもになく蛙の外にみ

る者も多けれど思へばいとあはれなる折から川上よりさとふきくる風に螢のおどろきちるさまひとしほあはれにて思はず

心して風もふかなむこよひこの
ほたるのけしきあはれと思はば

などロずさむ内にいづれよりかみな〳〵三つ四つつゝ螢をたづさへ歸りきつるにいざとて打つれ立ち家に歸り其夜はいとくるしくてあとさきもしらで打ふしぬ

植木　鋼子

夕月の影おぼろなるあせ道をたどりつゝ稚き人さへ打まじりて螢狩りにといで立ちぬ早苗うちなびきて吹風に衣手いとゝかろくあゆみ行くほどに田の面の水にかげ見えて星かとまがふばかり二つ三つ飛びかふ螢ありをさなきはゑましげにあれとらへんにも此所は道いとせまく便りあしかしこのみぎはは廣やかなるにいざたまへとて先に立ち小暗き足もとさかしくもつまからげして進み行くを皆々あとに引き續きゆきて見れば所々に生ひ茂る水草にすだくは照射火の影かとうたがはれ又道のへにはこがねの玉を散らせしゝと思ふ計りにみゆるもありあはれ此のうつくしき玉ひろひ得て人々にほこらばやと立寄ればあやなや風の誘ひきて手にもとられず飛び立つを猶追すがりはせめぐるに彼方はいとゞ高く昇りてさしまねく手も今は及ばず詮方つきて困じはてといきつきつゝ有程にうしろの方にのりどよめて人々つどひくる中にも彼稚子はいち早くこれ見たまへわらはが持てる此の籠にははや螢のみちて侍るが實にともし火にもまさる光りに侍らずやといとほこりがにさししめすを一人の友の打ち見やりてくちぬる草の時を得て化して螢となるとかやそれすらかゝる光りはあるになす事多くて世を送るやうなき人こそうたてけれとさかしらたちてつぶやくにぞ何といらへん者もなく初めのけしきに引かへてしづまりかへりて見えたるがいつしか一人二人と家路をさして行くにお

のれもひとりふり殘されじとふたゝびもとのあせ道傳ひ歸りつきつゝやれたる窓のもとにてかくはものしつ

勝家　貞子

ゆくりなく親しき友のとぶらひて此頃の夕やみに時をえがほにとびかふらん螢をいかに見過し侍らん今宵はいづれへかものせんものと打ちそゝのがすまゝに立ちいでぬれば田人どものしめひきはへていはひ引きし苗代水の邊りに螢の三つ四つ二つ飛びちがふなどいとをかしやがて千曲川の邊にいたりぬれば波風の清う吹き渡りて汀のあしの葉末よりはろ〳〵こぼれ落つる露かと見ればこゝかしこよりとびたつ螢の光りなりけりちら〳〵と浪にうつろふけしきえもいはぬさまなりみな〳〵あふぎ打ちかざしまねきよせて五つ六つとらへたるうれしともうれしくもちかへりて籠に入れたるにすきて見ゆる光の涼しくなるは古へ人の集め見んためしもかくやといとなつかしく侍る

なつかしき古へ人の面影も
見ゆる螢の光りなりけり

川井田さ代子

昔しもろこしの車胤を習ふにはあらねど友どち二たり三たりを語らひ乳母をぐしてたそがれ時よりうちは布袋など持ちて川のほとりに行く聲に出さで獨り身をこがす螢かずしられず浮草にとまりあるは空を飛びかふありあるは柳の枝にかゝりて星とまがふあり五つ六つはかりの童兒どもをかしきふしにて歌うたひつゝ螢をまねく妾等も螢の捕へたるを布袋に入れ飛ぶを團扇もておひ廻りあるは一つ螢をふたりにて爭ひなどもて暫くありて螢も袋に滿ちぬれは乳母の夜もふけぬ早く歸り玉ひねと進むるまゝ道ならぬ道に踏みまよふ人を正しき道に導けよなど物語りして立ち歸りぬ

水野　清子

ある夕つ方のことになむそこはかとなうそゞろありきつゝ風呂の下といふところに至りけるに幼き

童どものは丶木もちたるがをかしき聲して螢こい山見てこいとおもしろう歌ひつ丶はせありく樣の世になうあはれなりと目も放たずまもらひ居しに學びのやからにやあらん誰なりけんが物せられし衣肝に至り袖腕に至るてふ如きよそひしたるが連れ立ちて折にふれたるから歌なんど高やかにおのれがほゑて打ずしつ丶くる樣のこよなうをかしければかたへの人になどかう人の集ひくるならんときくにほ丶ゑみて螢とらんとてくるなめり興なきことをなの給ひそといらふる聲もさすがにをかしさればつ丶ましさも打忘れ聲をさ丶げて笑ひどよめき居し折こそあれ螢のとらへらる丶も知らでとびきたりければそれにがすなとて扇してかき落しつ小さき紙のふくろに入れなほもとりてんとてあまた人のある方へと行く程にいつしか紙もやぶる丶計りになりぬよき家づとを得てけりとうれしうてはせ歸りうすものはりたる籠に入れかへ水など打かけ涼しげにすきて見ゆる光をはめはやしつ丶机の上にのせ見むとて

螢をはけはしき道のしるへにて
いさたどらなむ文の林を

かく口咏みながら車胤がほして文よまんとせしをりしも大人氣なきことをなし給ひそもろこしの人をまねびてよとさゞめき笑ふ聲のきこえければたれならんとおどろきて見るにしたしき友なる何某の君の來給ひしなりけりつ丶ましさに紛らすすべもなかりき

孝貞の二こそ
婦道の第一なれ

（上杉治憲）

天賞堂諸物品調製之目的

凡そ時計指輪等金屬を以て調製する物品には單に實用目的のものあり裝飾目的のものあり實用目的の物品には敢て裝飾を要せざれども裝飾目的の物品殊に携帯具に至りては裝飾たるに足るべき性質形狀を具備せざる可からず（例は時計の如き實用目的に限るとせば專ら機械の堅牢なるを選び其外側は銀或は銅にても可なりと雖とも裝飾目的に至りては內部の機械の最良なるが上にも外側の金質製造等を精選すべきものなり）然るに世間往々此目的を混同するに由り或は廉價を主として調製粗惡に流れ啻に裝飾に適せざる而已ならず實用にも適せず却て其物品を携帯あるが爲に名士の品位を劣し閨秀の艶麗を損することありとす（衣服家屋調度みな盡く然り其中にも携帯具於て此事尤も多きは言を俟たず）是れ裝飾物品には其風韻雅致を備へ品質の精良と製作の巧妙を具するの必要あればなり

弊堂夙に此に覺ゆる所あるを以て實用品は專ら堅牢にして廉價なるを主とし裝飾品には第一に品◎質◎（即ち金銀寶石の品質を精良にし如何なる場合に於ても粗惡の品質を調製せず販賣せざるなり）第二に製◎作◎（即ち調製の初に於て卓絕の意匠家に謀りて形狀の新規高尚なるを擇び之を精妙なる工匠家彫刻家に囑附して製作せしめ以て美術の完備を專らとするなり）第三に時◎様◎（即ち時々の流行に注意し我國交際社會の時好ハ勿論歐米文明諸國の流行にも着眼し其中にて風韻雅致に富めるものを擇び或は是に加ふるに我一國の妙所を以てするなり）此三件を以て調製の目的とし猶中外愛顧諸君の爲に購求の便利を謀ると數年一日の如し弊堂が諸君の愛顧を得て今日の繁榮あるは實に之に由るを以て素より偶然に非ざるなり是に於て弊堂は更に此目的を擴張し今般特に自から商品販賣店則を設け賣品には都て正價（正札附）を附し謹で之を遵恪して敢て違ふこと無く諸君愛顧の恩に報ひんと期す諸君舊に倍して愛顧を垂れ賜はゞ信に弊堂の慶幸なりと云爾

明治廿五年一月一日

天賞堂主人江澤金五郎謹白東京市京橋區尾張町二丁目十八番地
○電話番號三百三十三

天賞堂商品販賣店則

品質を證明する事

時◦計◦（機械の中にて認め易き所に）鎖◦指◦輪◦帶◦留◦（貴婦人用）其他黄金調製品には天賞堂の刻印を打ち弊堂の販賣品たる事を證し次に純性の刻印を打ち其純質の幾許たるを證し凡そ黄金調製品は純金二十四を以て基とす故に二十と刻印する者には廿四の內にて純

物二十雜物（銀若くは銅）四を含むの證なり十八十六十四の刻印みな此例なり由て此證符あるものは金性一目して瞭然なるを以て通貨に於けるも同樣なり）次に番號の刻印を打ち調製原簿に登すべし（是は弊堂の原簿に一々以上の要領を記し購求者の氏名をも記し置くに付番號に照せは都て明瞭に何時にても知り得べし遺失盜難等の節は捜索するの便利是に若くは莫し）此證明は品質の確實なるを證明する爲なれは萬一其品質にして刻印に相違する物あらは弊堂乃ち其責に任し何時にても望に應して他の物品と交換し又は求に應して原價を還附すべし

製作を證明する事　鎖指輪帶留其他寶石寶玉貴金屬の裝飾美術品にして殊に我國に於て著名なる工匠家或は彫刻家に囑附して製作せしめたる巧妙の物品には前件刻印の外に其製作人の銘を打たしむべし若し萬一其製作贋銘たるの證據ある時は弊堂其責に任すると前件に同しかるべし

保存を請合ふ事　弊堂の刻印を打ちたる時計は其機械の組織に從ひ十ケ年より三十ケ年までの機械保存安全請合證書を附置べし若し此請合年限間に人爲の破毀又は外より來るの障害に非すして自然と機械に變化を生し使用に堪さる時は弊堂は新規の時計と交換するか但は原價を還附するか其望に應すべし

油注幷に磨直の事　弊堂の刻印を打ちたる時計は前件の請合期限內は毎年一回の油注幷に磨直しは都て其需に應し決して別に代價を要求せさるべし其他鎖指輪帶留等の掃除磨直も亦是に准して代價を要求せざるべし

交換幷に買戻の事　弊堂販賣物品は何品たりとも購求後もし其意に適はさる時は購求當日より時計は三十日他の諸品は一周間以內は（府外は相當の往復日數を加ふべし）凡そ其物品は破損毀傷なきに於ては何時にても需に應して他の物品と交換し又は原價にて買戻し聊かたりとも其爲に手數料若くは割引等を加へさるべし但し特別の注文又は好みに依りて調製したる物品は此限に非す

巡回販賣の事　各地方の愛顧諸君より郵便を以て弊堂物品の調進を求めらる丶近時日々に其數を增加せり然るに書狀往復の注文にては多數の物品中にて意に適するものを選擇すること能はさるは尤も顧主の不便たるを知り一兩年來弊弊堂の堂員に物品を提携して各地を巡回せしめて之を試みたるに大に顧主の便利を見たるに由り漸次擴張の計を立て向後は毎年一回若くは二回全國都會の市に向て必らす堂員を巡回せしむべし而して此巡回堂員は都て前件の店則に從ひ物品の交換は勿論油注及ひ磨直し（弊堂の刻印を打ちたる時計は其料を要せす）をなすと本店同樣たるべし但し此巡廻堂員の氏名滯在日數巡廻路順及各地宿所等は巡廻に臨み豫め其地方の新聞紙を以て廣告し愛顧諸君の注意に供すべし

國光第四巻第三號

（定價壹冊拾參錢 全國無遞送料）

目　錄

女鑑第十五號目次

(遞信省認可)

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京麴町郵便局へ御振込可被下事○郵便劵を以て代金に換用せらる、時は一割增の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若し强て領收證を要せらる、方ハ別に證書郵送料御送附の事○未稅の來書ハ一切受取不申候事

女鑑
毎月二回五日廿日發行
定價壹冊金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ケ年前金壹圓
全國無遞送料
廣告料五號文字廿三字詰一行十錢

明治廿五年三月十二日遞信省認可
明治廿五年六月四日印刷
同年同月五日出版

東京麴町區平川町五丁目十六番地
發行兼編輯人　西澤之助
同
印刷人　長屋基彦
同
發行所　國光社

(東京國光社印刷部印行)